

---

Only the piano : her friend.

壇 敬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Only the piano : her friend .

### 【Nコード】

N4078F

### 【作者名】

壇 敬

### 【あらすじ】

トランペットを吹く駿平とピアノを弾く律子の二人の恋と、音楽の世界のいろんな思惑が絡み合いながら展開してゆくラブストーリー。作者は結末を「ハーフバッドエンド」と解釈しています。

## 一、アブローチ

黙々とクラリネットを吹くあの娘。淡々と、練習メニューの音出し、運指、スケールをこなしてゆく。

彼女の名前は、雨宮律子。

ショートボブで、アースカラーの色の服が多い彼女。目立つ娘ではないけれど、割と美人なのだ。物静かで、休憩時間もみんなの後ろで、みんなの話を聞いているだけ。

でも、演奏はみんなに負けていない。なんたって彼女は、ファースト・クラリネットだ。彼女の性格上、主席って訳ではない。

いつも市民吹奏楽団の練習に来ると、そんな彼女のことが気になって仕方がないのだ。

そうなんだ、僕は彼女のことが好きなんだ。

そんな僕は、戸倉駿平、トランペットを吹いている。だけど、このトランペットが曲者なんだ。三十分もすると息が苦しくて、唇が疲れてくる。ハイトーンなんか出やしない。

でも、僕はこのトランペットが好きなんだ。マイルスのCDを聞いてからは、もうメロメロ。こんな風に、トランペットを泣かせるように吹きたい。

だけど、いつまで経っても上手くならない。ファーストなんかやったこと無いよ。だから、彼女に引き目を感じてるんだ。いつもは騒がしい僕でも、ナイーブな部分もあるのさ。

ある日の、練習の休憩時間のことだった。

僕は珍しく練習場に残って練習していたら、彼女と二人つきりになった。彼女は、紅い原典版のピアノ譜を見ていた。僕は近づいて、彼女に声を掛けた。

「誰の作品のピアノ譜？」

彼女は急に声を掛けられてビックリしたようで、鋭く僕を注視し

た。それから、どもりながら答えてくれた。

「モ、モーツアルトの、ピ、ピアノソナタ集」

僕は楽譜を覗き込んで言った。

「雨宮さん、ピアノも相当上手いんだね」

彼女はビックリした表情を僕に向けた。僕はことも無げに答えた。

「だって『十八番 二長調 K・五七六』を開いてるから」

彼女は更に目を丸くして、僕に聞いた。

「な、なんでそんなこと、解るの？」

僕は、はにかんで答えた。

「それは、ひ・み・つ」

僕は自分の席に戻って、トランペットの練習を続けた。彼女はズット僕を睨むように見つめていた。休憩が終わって合奏が始まったが、チラチラと僕の方を見ていたようだ。

僕の中の何かが囁いた。

練習が終わった後、思い切って彼女に声を掛けてみた。彼女は丁度、ロビーを歩いていた。

「雨宮さん」

僕の声に彼女は振り返って立ち止まった。僕は急いで彼女に駆け寄った。

「あのさ、明日、時間あるかな？ あのさ、よかったら、ピアノのコンサートに行かない？」

彼女は僕の顔を見て僕の話聞いていたが、僕が言い終わると彼女は下を向いて言った。

「明日はダメなの」

そう言い終わるか終わらないかのうちに、彼女は走り去っていった。

立ち続ける僕に、同僚のホルン吹きが声を掛けた。

「振られちゃったのか、駿平。大丈夫、大丈夫。何とかなるって」

僕は、気のない返事をしてごまかした。

「ああ、そうだな」

僕は、彼女の走り去った方向をずっと見つめていた。

## 二、うわさ

実を言うと僕は以前から知っていたのだ、「雨宮律子」という名前を。

それはピアノのコンテスト会場だった。彼女は様々なピアノコンテストに出場し、いつも入賞しているのだった。ただ、優勝したという話は聞いたことが無かった。

ピアノのテクニクも上々で、優しい音色で心休まる響きだったが、選曲が悪いのか、曲想を表現し切れていないのか、何かしらインパクトに欠けるのだ。

雨宮律子の父親は中堅のピアニストで、この地方では名の知れた演奏家だ。若い頃はヨーロッパで演奏していたこともあるらしいが、今はもっぱら後進の指導を中心としている。

そして雨宮律子の母親は、ヴァイオリン奏者だ。地元のオーケストラでコンミスとして活躍する他、ソロ活動とヴァイオリン教室を主宰している。

そんな演奏家の両親の元で英才教育された彼女に期待が集まるのは、周囲を含めて仕方のないことだ。彼女はいつもプレッシャーと戦っているのだ。

どうしてそんなことを知っているかというと、この僕もピアノを弾くからだ。「そこそこ出来る」と自分では思ってるが、師匠に言わせると「十年早いんだよ!」といつも叱られた。

そんな訳だから時々、師匠にピアノコンテストの出場を強制させられた。師匠は、僕を千尋の谷に突き落とすのだ。いつも返り討ちに遭ってボロボロになるが、一度だけ「優秀賞」をもらって師匠の鼻を明かしたことがあった。その時も、彼女は入賞していた。表彰式ですつと下を向いていた彼女の印象が、僕の中にずーっと残っていたのだ。

だが、最近の僕はもっぱら、ピアノよりもジャズトランペットに傾倒している。マイルスを知ってからにはジャズにのめり込んでいる。さらに僕は、マイルスに近づくためにトランペットを始めたのだった。師匠にはまた「それこそ二十年早いんだよ」と釘を刺されている。

初めは独学でやっていたのだが、同じ師匠にピアノを習っていて、学校の吹奏楽サークルでホルンをやってる友達が「一人でやるよりいいぞ」と、市民吹奏楽団に誘ってくれたのだ。

でも、この吹奏楽団に彼女が在籍しているとは考えもしなかった。ましてやクラリネットを吹いているなんて全く想像すら出来なかった。

雨宮律子は、いろいろな噂がある。

彼女には、いい意味でも悪い意味でも存在感がある。例え彼女が物静かな人物で、ひっそりとした性格であっても、音楽の世界では否応無しに、彼女のことは話題に上るのだ。

まずは、レッスンのことだ。彼女の父親は、彼女に相当な過酷なレッスンを強いているという噂だ。週に六日で、残りの一日も父親がレッスンしているという。もちろんピアノだけでなく、聴音やコールユーブンゲン、楽典の音楽の基礎も含まれているのだが。いつ練習してるんだ？って話だ。それでも彼女は、そのレッスンをこなしているという噂もあるから、末恐ろしい感じもするが、それだけ彼女に才能があるということなのか。

前回の練習の時にデートに誘ったけど、振られた理由がレッスンだった。やっぱり、本当なのかもしれない、そのレッスンの過密さは。

楽団の練習の時、フルートの女達が雨宮律子のこと喋っていたのを見逃さなかった。僕は知らん顔でそっと盗み聞きをした。

「雨宮さん、大変そうね」

「ピアノの気分転換に、って言ってたのに」

「初めは明るかったのに」

「でも、息抜きで吹奏楽をやられてもねー」

「今はもう、息抜きで無いそうよ」

「え、どうして、どうして？」

「両親に言われたんだって」

「『ピアノか、クラリネットか、どっちなんだ』って」

「ひゃー、究極の選択だわー」

「今じゃ、クラも習いに行ってるって！」

「彼女、何か楽しみはあるのかしら？」

「さあ……」

彼女達のうわさ話をきいて、僕は思わず拳を握り締めた。

『雨宮律子が、彼女達に哀れまれる理由なんてないぞ！』

『彼女は十分に頑張ってるじゃないか。お前達よりも立派だよ！』

僕は心の中でそう叫んでいた。

彼女のクラリネットはホントに上手いのだ。リードミスを聞いた

ことがないのだ。

『いつ、練習してるんだ、ホントにいい？』

僕は、ますます彼女のことを気になっていた。



### 三、約束

楽団の練習がいつものように始まった。

最初に個人での音出しとウォーミングアップが終わると、パート毎にスケールとアルペジオ、アンサンブルの練習、その後はウッドセクションとブラスセクションでの曲練習を行う。休憩を挟んで、全体の合わせ演奏というのが楽団の練習課程だった。

雨宮律子はクラリネット、僕はトランペットだから、一緒に練習できるのは、休憩の後の全体練習しかない訳だ。全体練習の時でない、彼女の様子は伺えないのだ。

今日の彼女の様子はいつもと変わらなかった。ひた向きに楽譜を追いつ、指揮者の指示をメモし、演奏に没頭していた。顔を上げるのは、指揮者を見る時、指揮者の指示を聞く時だけ、あとは前下がりのボブカットが彼女の顔を隠して、表情がよく読み取れなかった。

僕はやっぱり気になっていた、雨宮律子のことが。無駄かもしれない。無理かもしれない。だけど、もう一度だけ彼女に声を掛けてみようと思った。それは義務感なんかではなかった。僕の素直な気持ちだった。

楽団の練習が終わると直ぐに僕は慌てて楽器を片付けて、彼女の姿を追った。そして、ロビーのところで彼女に声を掛けた。前回と同じように。

「雨宮さん、待ってよ」

僕の声に、足早に歩いていて彼女はずっと立ち止まった。そして振り返って僕の方を見据えて言った。

「何か、用ですか？」

彼女は、練習の時と同じように、前下がりのボブカットが彼女の表情を隠していたが、その返事の声の低さや抑揚のぶつきら棒な感じで彼女の気持ち伝わってきた。『私に関係しないで』と言わん

ばかりの雰囲気だった。

そんな彼女の態度に、僕はたじろいだ。だが、後には引けなかった。僕は声を掛けようと思った時の気持ちを思い起こして、声を振り絞った。

「え、えつと、今日はこれから暇かな？」

彼女は、相変わらず下を向いていた。そしてそのまま微動だもせずこう言った。

「時間なんて……空いてないわ」

僕は、その答えは予想済みだった。だけどその答えに対抗する手段を持っていなかった。だから、なおも食い下がる以外に方法がなかった。

「それじゃあ、いつなら空いてる……かな？」

彼女は何かを考えている風ではなくて、全てを受け入れる余裕がないといった感じだった。全く顔を上げずに、諦め切った、力ない小さな声で答えた。

「空いてる時間なんて……」

僕は、聞き取れない小さな声になっている雨宮律子に少し苛立った。後から考えたら『どうしてこんなことを言ったのだろう』と思っただのだが、それでも彼女のことを思っ、気に障らないように恐る恐る訊いた。

「それって、レッスンだから？」

『レッスン』という言葉に彼女は異常な反応を見せた。突然僕の方を向いたかと思うと、大きく目を見開き、口を尖がらせて、彼女の声としては聴いたことのないような大きな声を発した。

「そうよ！」

そして、カバンと楽器ケースをキュツと握り直して、玄関の自動ドアへ走り出そうとした彼女の腕を、僕はまるで条件反射のように、とっさにグイッと掴まえた。

彼女は、腕をつかまれた拍子に走り出そうとした身体が制止され、髪の毛と体勢が崩れた。そして、彼女は乱れたれた髪のまま、僕を

睨みつけた。

僕は、自分が思わず行動してしまったことと、その行動自体が大胆だったことに自分自身が驚いていた。そして、ほんの一瞬のパニックが過ぎ去り、自分が彼女の手をつかんでいることを認識した時、僕はゆっくりと脱力しながら彼女の腕を離して静かに言った。

「乱暴にしてごめん。そんなつもりじゃないんだ。僕は君のピアノが聴きたいだけなんだ」

僕が喋り終わるまで、彼女はずっと僕を睨みつけていた。それは数秒間、そのまま続いた。

その数秒後、彼女はやっと僕の言葉を理解したようだった。急に彼女の鋭い厳しい表情が崩れ、身体力が抜けた。そして、僕の言葉に対して彼女の感想めいたものが、嗚咽のような言葉で漏れてきた。

「え!？」

信じられないという表情と、不思議に優しい表情が、彼女の顔に入り混じっていた。僕が今までには見たことのない彼女の顔、彼女の表情だった。

僕は、出来るだけ静かに、優しく、祈るように、懇願するように言った。

「君のピアノが聴きたいんだ」

だが、その言葉は逆効果だったようだ。その言葉を聞いた彼女は、その言葉が頭の中のいろいろなところを駆け巡って、悲しい思い、嫌な思いを通過したのだろう、また表情を暗く、悲しく、冷たく、硬くした。だが、今度は下を向かずに真っ直ぐに僕の顔を見て、振り絞るように彼女はこう言った。

「ごめんなさい」

彼女はそう言って、下を向いてカバンと楽器ケースを持ち直して、玄関の自動ドアに向かって走り去った。

僕は、ちよつとだけ、ほんのちよつとだけだけど、何かを感じ取った。だから、僕は最後の望みを掛けて、彼女の後姿に向かって大声

で言った。

「来週はいいよねっ？」

間髪を居れずに、僕はもう一声掛けた。それは念を押すように。

「約束だよ！」

彼女は一瞬立ち止まったが、足早に自動ドアの向こうに消えていった。

僕は、彼女が出口で左に曲がって見えなくなるまで、立ち尽くしていた。見えなくなった途端に気が抜けて、肩を落とした。

## 四、デート

「来週はいいよねっ？」

「約束だよ！」

前回の楽団の練習の後、雨宮律子が去って行く後姿にこう言い切ったものの、僕自身には全く自信がなかった。そして、正直言って彼女がどんな反応をしてくるか、期待することが出来なかった。

だけど、淡い希望だけは捨て切れなかった。なぜなら、一瞬だが僕に見せたあの優しい表情が嘘でないように思えてならなかったからだ。それに、僕が彼女に恋しているから、可能性が全く無いに等しくてもそう思ったかった。

「彼女に迷惑だったかな」

楽団の練習を明日に控えて、僕はベッドの中で弱気なことを考えてしまった。

翌日、楽団の練習はおかしな雰囲気が漂っていた。僕は平静を装い、彼女もいつも通りの感じだったが、周りがそうではなかった。特に、全体練習が始まってからは気不味い雰囲気だった。

どうやら、前回の玄関ホールでの僕と雨宮律子のやり取りが、楽団全体にうわさとして広まっていたようだった。だから、楽団員はまるでテニスの試合のラリーのように、僕と彼女を交互に見て様子をうかがっていた。

全体練習に入る前の休憩時間、ウーロン茶をすすっていた僕にホルン吹きの奴が訊いてきた。

「おい、どうなったんだ？」

僕は知らんふりして答えをした。

「何が？」

ホルンの奴は苦み走った顔をして言った。

「とばけんなよ！ 雨宮さんのことだよ」

僕はウーロン茶をすすって答えないでいた。

その様子にシビレを切らしたホルン吹きは嫌味を言った。

「じれったい奴だな」

そして、ホルン吹きは単刀直入に訊いてきた。

「ははん、フラレたんだな？」

何も答えない僕に、ホルン吹きはしたり顔でこう言った。

「そうだろ。やっぱり、凶星なんだな」

そう言って、ホルン吹きは僕の所を去っていった。

僕は、周りに聞こえない程の小声で呟いた。

「そんなこと、ない、……はずさ」

だが、それは僕の淡い希望であって、現実とはかけ離れているだろうという予想が、僕の心の中を支配していた。

練習が終わって、僕は周りの様子を知りたくないといった感じで下を向き、そそくさとトランペットを片付けた。

重々しい足取りでロビーに降りてきたところで、僕はビックリした。ロビーの待合の椅子に、雨宮律子が座っていたのだ。

僕は信じられなかった。まさかと思った。だが、彼女がここに座って待っているのは、僕を待っているとしたか考えられないという思いが、僕の心の中で確信となって表れてきた。

僕は思わず足早に彼女に駆け寄り、彼女の背中から声を掛けた。

「雨宮さん、どうしたの？」

僕の声に、彼女は振り返った。彼女は声を掛けたのが僕だと認識すると、前下がりのボブカットの髪を掻き分けて、いかにも慣れない風、ぎこちない笑顔を僕に向けてくれた。そして小さな、愛らしい声でそっと呟いた。

「……約束は、守らなきゃ」

彼女は直ぐに下を向いた。ボブカットが邪魔して彼女の表情が読み取れなかった。

僕は、急に口元が緩んだ。

「ありがとう」

僕は立て続けに言葉を発した。

「今から、時間あるかな？ レッスンとかは大丈夫かい？」

僕の捲くし立てるような話し方に彼女は戸惑い、彼女の笑みはますます引きつっていった。

彼女は落ち着いてから、ゆっくりと言葉を発した。

「今週は五週目だから、レッスンは無いの」

それを聞いた僕は、彼女の手を引いて立ち上がらせた。

「それじゃあ、行こう！」

彼女は、びくびくした表情で僕に尋ねた。

「え？ ど、どこへ行くの？」

僕は、飛び切りの笑顔を彼女に向けて言った。

「音楽が楽しめる場所さ」

僕は、彼女の手をとって自動ドアを出た。

## 五、ライブハウス

「どこへ行くの？」

びくびくした表情で僕に尋ねる彼女に、僕は飛び切りの笑顔を彼女に向けて言った。

「音楽が楽しめるところさ」

辿り着いたのは、僕の行きつけのライブハウス。店のドアを開けると音楽は鳴っていたが、演奏してる雰囲気ではなかった。

ウィークデイだからといってライブ演奏がない訳ではないのだが、今日の曜日は比較的演奏が無い日なのだ。

店の奥へ行くと、マスターが声を掛けてきた。

「よお、駿平。いらっしやい」

マスターは苦虫を噛み潰したような顔をして僕に言った。

「ちょっとピアノを弾いてくれよ。生音がしないライブハウスは、格好がつかん」

僕は、にやりと笑ってうなずいた。

マスターは、僕の後ろにいる律子を見逃さなかった。

「駿平！ 女連れじゃねーか！」

そう言っていると、マスターは僕には見せたことのない笑顔で律子に声を掛けた。

「いらっしやいませ、お嬢さん。ちょっと汚い所だけど、良い音を聴かせるよ。音響はバッチリだよ。ゆっくりしていったね」

マスターは律子に手を振った。

律子は、相変わらず引きつった笑みで答えた。

「あ、ありがとうございます」

マスターは、僕に向き直って言った。

「この娘が、いつも話に出てくる……」

僕は、慌ててマスターの言葉を遮るように言った。

「ピアノに近い席、座るよ」



マスターは、指でOKサインを作ってから言った。

「ピアノ、頼む」

僕は、マスターにグッジョブサインを送った。そして、ピアノに一番近い丸テーブルに律子と向き合って席に着いた。

「雨宮さんはこんな所、来たこと無いよね」

律子は、見回してから僕の言葉に答えた。

「ええ、初めて」

僕は、ワクワクしながら律子に語り掛けた。

「面白いぞ。ここにはいろんな音楽があるぜ。ジャズやフュージョ  
ン、ロック」

僕は身を乗り出して律子に聞いた。

「雨宮さんは、クラシックばかりなの？」

律子は、少しムツとした。

「聴くのはいろいろ聴くわ」

そして、ちよつと目を伏せた。

「でも、演奏するのはクラシックだけ」

マスターが来て、コーラとオレンジジュースを置いた。

「お熱いお二人さんにどうぞ。ちなみに、これは俺の奢り。だから、早くピアノを弾いてくれよ」

僕は、マスターに促されてピアノの前に座った。マスターは、DJブースに入ってCDを止めた。そして、僕は静かにピアノを弾き始めた。

一曲目は、スローテンポの「枯葉」を独特の哀愁をジャズ風のイントネーションで弾いた。

続いての二曲目は、スタンダードの「八十日間世界一周」を中庸なリズムの中に、緩急を付けて演奏した。

そして三曲目は、軽快なリズムの「A列車で行こう」だ。この曲はマスターのお気に入りだ。マスター自ら、ジェットブラックのサイレントコントラバスで弾いてくれた。

僕は席に戻って、律子に感想を聞いた。

「どうだった？」

律子の顔には、自然な笑みがあふれていた。

「うん、とってもいい感じ。自然に、身体がリズムを取ってるの」  
そして一旦、マスターの姿を見てからこう言った。

「マスターのベース、素敵ね」

律子の目は輝いていた。僕はもう一度、律子に訊いた。

「楽しい？」

律子は即答した。

「ええ、とっても」

僕は思い切って、律子に言った。

「君もどう？」

律子はキョトンとしていた。

「え？」

僕は説明するように言った。

「ピアノ、弾いてみない？」

## 六、ピアノ演奏

「ピアノ、弾いてみない？」

僕は思い切って、律子に言った。

本当は、前々から考えていたことだった。コンテストなどのホールじゃない所で弾く、律子のピアノが聴きたかったのだ。

律子は、驚いてたじろいだ。

「私、ジャズなんて出来ないわ」

僕は、律子に優しく言った。

「ジャズにこだわらなくてもいいよ」

「えー、でもー」

律子がモジモジしていると、その後ろからマスターが割り込んできた。

「聞いてますよ、お嬢さんはピアノが上手いって。うちの店は、音楽のジャンルを問いませんから、是非、弾いてくださいよ」

僕は、彼女の弾く曲を前から考えていた。だけど、今思いついたように律子に言った。

「そうだ！『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』はどう？ これならクラシックでOKだよ」

律子はしばらく考えていたが、すくつと立ち上がった。

「じゃあ、弾いてみる」

そう言って、ピアノに向った。

彼女は椅子を調整して一瞬宙を見てから鍵盤に向かい、そして弾き始めた。

コンクールで聴いた律子のピアノとは違っていた。弾むように、そして持ち味の優しい音色が響き、心なしかフレーズがジャズ風になっていて、実に生き生きとした律子のピアノだった。

弾き終えて立ち上がった律子に、店の中から拍手が沸き起こった。律子は、深々とお辞儀をして席に戻ってきた。

僕は、拍手で律子を迎えた。

「ブラボー、よかったよ」

律子は手のひらを左右に振りながら、恥ずかしそうに言った。

「ミスタッチばかりよ」

僕はコーラをすすりながら、律子に訊いた。

「でも、気持ちよかったでしょ？」

律子は、僕に向って満面の笑みを浮かべて、静かに、でも大きくうなずいた。

律子が時間を気にし始めたので、僕は店を出ることにした。

「もう、お帰りか」

マスターが声を掛けてきた。

「うん、彼女の門限がね」

僕はちよつと照れながら答えた。

「そうか。モテる男はつらいなー」

マスターは僕にそう言い、律子にも声を掛けた。

「お嬢さんのピアノ、よかったー。演奏をありがとう。是非また来てよね」

律子は恐縮して言った。

「ハイ、ありがとうございます」

僕と律子は席を立った。

「じゃ、駿平。またな」

そう言つてマスターは、店の入り口まで送ってくれた。

僕と律子は、一緒に歩き始めた。僕は歩きながら正面を見たまま言つた。

「今日はありがとう。強引な約束を守ってくれて」

律子も正面を向いたまま、僕の言葉に応えた。

「ちようどよかったの」

僕は律子の方を向いた。

「何がよかったって？」

律子は夜空を見上げながら言った。

「何でもない」

そして僕の方を見て言った。

「今日は楽しかったわ。ありがとう」

そう言い終わると、律子は駆け出した。しばらく走ってから、振り返った。

「またねー」

そう言うのと、律子は再び振り返って走り去っていた。僕にさよならを言う暇を与えなかった。

僕は、ずい分小さくなった律子の姿に手を振った。そして、大声でこう叫んでいた。

「またなー」

そして、僕はつぶやいた。

「『また今度』って、次の五週目はいつなんだ？」

## 七、海のデート

僕と律子は、吹奏楽団の練習の後、いつも一緒にライブハウスに行った。それが、僕と律子のデートの定番だった。

うわさ通り、律子のレッスンスケジュールは一週間を通してビッチリだった。だから、精々それくらいの時間しか、律子の都合が付かなかったのだ。

いつも、僕と律子のつながりは音楽だった。ライブハウスで演奏して、時には律子との連弾をしたりした。マスターとおしゃべりも楽しかった。音楽談義に花が咲いた。

それだけでも十分に満足だったけれど、でも、それだけじゃ、何か物足りない……。

ある日曜日の朝、律子から電話が掛かってきた。

「今日はいいい天気ね」

「うん、そうだね」

「暑くなりそうかな？」

「たぶん」

「日焼けしちゃうくらい？」

「昼から雷だつて予報だよ」

「えー、雷なの？」

「律子は雷、ダメなんだ」

「そう、怖いよ」

僕は、要領を得ない律子の喋りが気になった。そして僕はあることに気が付いて、律子に語りかけた。

「ねえ、律子。もしかして今日は一日、空いてる？」

しばらくの沈黙の後、律子は小さな声で行った。

「……うん」

僕は、ニヤリとしながら携帯電話を右から左へ持ち替えた。

「じゃ、これから海に行こうよ」

律子は、動揺していた。しかしそれが嫌な動揺ではないことは律子の声から分かった。

「え、急にそんなこと、言われても……」

僕は、尚も食い下がった。

「海に行くだけでよ。泳ぐ訳じゃないんだし」

いつもなら答えるのに時間の掛かるのだが、今日の律子は答えるまでが早かった。

「分かったわ。行くわ」

僕は、待ち合わせの時間と場所を告げて、電話を切った。

僕が待ち合わせ場所である、駅のロータリーに着いたのは、待ち合わせ時間を五分過ぎていた。律子は既にロータリーで待っていた。律子は、僕を見つけると手を振りながら走り寄ってきた。

「ごめんね、遅くなっちゃって」

僕は、遅れてきた非を詫びた。律子は笑顔で答えてくれた。

「大丈夫よ、私も今来たところだから」

水色のフレアスカートに、白いノースリーブのキャミソールの上にレースのボレロを羽織ったその腕は、日焼けで少し赤くなっていた。

僕と律子は、電車に乗って海へ出掛けた。

「律子と音楽の絡みなしでデートするのは初めてだね」

僕がそう言くと、律子は照れた。

「私、こんな風に男の人とどこかへ行くのは初めてかも」

僕はちよつとビックリした。

「えー、そうなんだ。いつものライブハウスは？ あれは違う？」

「だって、あれは、あの、その……」

律子は顔を真っ赤にして、シドロモドロだった。

「ごめん、ごめん。いじめてる訳じゃないんだよ」

僕は律子を困惑から助け出そうとした。

「律子は純粹なんだなーって、そう思ったのさ」  
律子はブイと横を向いて知らん顔をしていた。

駅から海岸までは、少し距離があつた。僕と律子は、お土産屋をチリチリと覗きながら、海岸までの道を急いだ。

白い砂浜と、青い海が、そこに開けていた。

律子は日に焼けないようにと、お土産屋で買った可愛い花の付いた麦藁帽子をかぶって、砂浜を駆け出した。僕は、律子の後を追って走り出した。

風で麦藁帽子が飛ばされそうになって、頭を押さえて立ち止まつた律子に、僕は律子の後ろから腰に手を回して、律子を抱きしめた。  
「っーかまえた」

僕が無邪気そうにそう言うと、律子は恥ずかしそうにした。

「いやん、止めて」

律子にそう言われた瞬間に、僕も急に律子を意識した。そして、律子を抱きしめていた手を緩めた。

「あ、ごめん」

二人は急に照れ始めた。

でも、僕は一旦緩めた手を、もう一度律子の腰に回して抱きしめた。そして、僕は呟いた。

「好きだよ、律子」

そういつた途端に、律子の強張らせていた身体の力が抜け、僕の腕に手を重ねた。そして小さな声で律子は呟いた。

「私も、好き」

しばらく、僕と律子はそのままだった。

やがて、律子がうめき声を上げた。

「駿平、苦しい。息ができないわ」

知らないうちに、律子を抱きしめる僕の腕の力が強くなっていたようだった。

「あ、ごめん」



僕は慌てて、自分の手を解いた。

律子は、ほっと溜息をついて僕の顔を見た。

「もう、ビックリしちゃった。死ぬかと思ったわ」

そう言いながら、律子の顔から笑顔が絶えなかった。そして、律子は僕の首筋に抱き付いてきた。

そして、僕の頬に軽くキスをした。

「嬉しいわ」

そう言っていると、律子は手を振り解いて、また浜辺を走り出した。

走り出す律子を見ながらキスされた頬に手を当ててボーっとしていたが、ふと我に返って、僕はまた、律子の後を追った。

「待てよー」

僕がそう言いながら追い掛けると、律子は笑いながら僕に言った。  
「駿平、いつも一緒に居てね」

僕は、大きくうなずいた。

## ハ、レッスン

「いい音だね、律子」

雨宮律子はレッスン室でピアノを練習をしていた。そこへ父親が入ってきて、一言漏らした。律子は、チラッと父親を見たが、そのままピアノを弾き続けた。

『シューベルト即興曲OP九〇・三』

弾き終えた律子は、ゆっくりと父親の顔を見た。父親は、満足そうに律子の顔を覗き込んだ。

父親の雨宮健一は、中堅のピアニストで、この地方では名の知れた演奏家だ。若い頃はヨーロッパで演奏していたこともあるが、その頃の無理がたたって身体を悪くし、今はもっぱら後進の指導を中心としている。

ヨーロッパから帰国した本人の弁は「やっぱり醤油が恋しくて帰ってきたかったよ」というものだった。

「恋を、してるね」

健一はピアノの黒い表面を撫でながら、そう言った。しかし、彼の目は律子から離れなかった。

彼女は鍵盤を見たまま、何も言わなかった。だが、少しだけ頬を赤くしてしまった。

「そうなんだね」

健一は楽譜を見ながら、更に付け加えた。

「『ダメだ』とは言わない」

律子は顔を上げて、父親の顔を見た。だが、健一の視線は楽譜に注がれていた。

「だが、節度がないといけないよ」

そう言い終わると、楽譜を指し示して、律子のピアノの指導を始めた。

一時間後に律子のレッスンが終わった。

楽譜を片付ける律子に向って、健一は大胆な発言をした。

「今度の休みに連れて来なさい」

律子は驚いた。父親がそんな発言をするなんて、想像すら出来なかったのだ。だが、その後の、父親の言葉を聞いた後は、何とも言えない気分になった。

「私が吟味しようじゃないか」

健一はそう言ってレッスン室を出て行った。

次の楽団の練習日、練習室に入ってきた戸倉駿平を呼び止めた律子は、小さな声で呟いた。

「え？」

駿平は、思わず聞き返してしまった。律子の言葉がすぐに理解できなかった。

「今度の日曜日に、家に来ない？」

律子がそう言ったように聞こえた。でも、確信がなかった。

「ど、ど、どうゆうこと？」

ポカンとしている駿平に、律子はじれったそうに同じことを繰り返した。

「だから！」

律子は大きく声を張り上げた。

「今度の日曜日に家に来てって言ってるの！」

僕はのぼせ上がった。それと同時に、律子の家庭環境が思い浮かんで、冷や水を浴びせられたような冷静さも忘れなかった。

この頃の、僕と律子はずい分仲良くなっていた。すぐに五週目ずつのデートではなくなり、市民吹奏楽団の練習が終わった後には必ず、いつものライブハウスで、デートを重ねていた。

律子の大きな声に、楽団員が振り向いた。そして駿平と律子を冷やかした。

「おいおい、大きな声でデートの約束かぁ！」

「ヒューヒュー、お熱いお二人さんね」

その声に、律子は顔を真っ赤にして部屋を出て行った。僕も律子を追って部屋を出た。

部屋を出たところで、律子は立っていた。僕は律子にぶつかりそうになった。

「もう！ 駿平ったら！」

律子は口を尖らせながら、手の甲をつねった。

「イテテテ、ごめん、ごめん」

僕は痛がりながら、謝った。

「ちよっと信じられなくてさ」

そして、僕は間髪入れずにこう言った。

「今度の日曜日だね。空けとくよ。必ず行くから！」

僕がそう言くと、律子はニッコリ微笑んだ。だけど、すぐに普通の顔に戻った。

僕の「冷や水を浴びせられたような冷静さ」と同じことを考えているのだろう。

律子はゆっくりと喋り始めた。

「あのね……」

## 九、訪問

「あのね……」

律子はゆつくりと喋り始めた。あんまり浮かない顔をしながら。

「父が、連れて来いって」

僕の想像通りだった。

噂通りのレッスンを律子にさせている、あの有名な「雨宮健一」だ。そんなことを言いそうなのは想像に難くなかった。

僕は努めて明るく言った。

「そっか。そうなんだ。でもさ、大丈夫さ」

僕はかぶりを振った。

「とりあえずは『友達』ってことで、うん」

律子の表情に少しだけ赤味が戻って、口元にほんの少し、笑みが浮かんだ。でも、律子の目は笑ってなかった。

「父は『恋をしてる』って言ってた」

僕は雨宮健一の眼力に驚いた。さすがはプロだ。律子の弾くピアノの音にまで敏感なんだ。

僕は「ハァー」と溜息を吐いてから、律子の手を取り、彼女の目を見つめて言った。

「変なごまかしは、しない方がいいようだね。僕と律子はいつも通りだよ、うん。それで行こうよ」

僕がそう言くと、ようやく律子の目が優しくなった。そして、小さくうなずいた。

「うん、そうね」

日曜日の午後、僕は律子の家の呼び鈴を押した。

律子の家は、さすがに大きい。両親が伊達にプロを名乗っている訳ではない。レッスン室が三つはあるという噂だ。

律子が玄関を開けて、迎え入れてくれた。

「どうぞ。中に入っ」

律子に言われて玄関をくぐった。そこには、彼女の母親「兩宮奈津子」が立っていた。

「駿平くん、どうぞ」

母親の奈津子にその声を掛けられた僕は、いきなりビビッた。

（あちゃー。名前まで知れているぞっ）

兩宮奈津子は、ヴァイオリン奏者だ。地元のオーケストラでコンミスとして活躍する他に、ソロ活動とヴァイオリン教室を主宰している。

玄関を上がって、応接間に通された。

ナチュラルのフローリングに、白い壁、白いソファセットがガラスのテーブルを挟んで置いてあった。

まんじりともせず、ソファに座った。

僕は全然落ち着かなかった。

しばらくすると、律子と母親がお茶を持ってきた。母親は、紅茶を出しながら律子に言った。

「律子、駿クンの隣に座りなさい」

母親の言葉に、またまた僕はビビッた。

（駿くん……って、いきなり碎けてるよ）

「はい、お母さん」

律子は平然として、三人掛けソファに座る僕の横にちょこんと座った。

母親は、紅茶を出し終わると、三人掛けソファの反対に置かれた、二つ並んだ一人掛けのソファに深々と腰掛けた。そして流暢に話し始めた。

「ごめんなさいね。主人、午前中には帰る予定なのに遅れてるのよ」  
母親の奈津子は溜息をついた。

「結局、私に押し付けなのよね」

そう言っって母親は、紅茶をすすった。

「駿くん、あなたのことは娘から聞いていますわ。私たち、仲の良

い母娘なんですの」

母親はまた、紅茶をすすった。

「駿クンとお付き合いを始めてから音が変わったわね」

母親の奈津子は、律子の顔を覗き込むように言った。

「いい音になったわ」

そして、遠くを見る目でささやいた。

「恋っていいわね」

母親は、紅茶のカップ&ソーサーを置いた。

「あ、そうね。駿クンもピアノ弾くのよね」

そう言いながら母親は僕を見た。

「是非、聴きたいわあ。聴かしてくれないかしら？」

僕は、最初から圧倒されまくっていた。僕の想像していたイメージとは、全然違っていた。「こんなに碎けてていいのか？」と、僕は自問した。

気が付くと、律子が母親に意見していた。

「ダメよ。今日は緊張してるんだから！それに、そんなつもりで駿平クンは来てないし」

母親も負けてなかった。

「あゝら、いいじゃないの。あの人、どうせ今日は帰らないわよ」

父親の悪態をつきながら、律子を諭していた。

「あの人の方が緊張しているんだわ、きつと」

母親はじれったさに我慢しきれず、席を立って、僕を手招きした。

「さあ、レッスン室へ行きましょ」

母親は律子の腕を引っ張った。

「ほら、律子も立って！」

律子は呆れ顔で言った。

「お母さんは、言い出したらきかないんだから」

そう言ってから僕に向き直った。

「ごめんね。お母さんの言う通り、お父さんが居ないの」

律子は申し訳なさそうに僕に頼んだ。

「悪いけど、今日はお母さんに付き合って」

僕は、肩透かしを食らったようだ。だけど、僕も少しリラックスできそうだった。僕は、母親に向き直って言った。

「はい、分かりました。少しだけ、ボロが出ない程度に」

母親は嬉々として言った。

「じゃ、レッスン室にレッツゴーよ!」

母親はドアを開けて廊下に消えていった。

僕と律子は、顔を見合わせてプツと吹いた。

「セッションだ」

「ええ、セッションよ」

僕と律子も廊下に消えていった。



## 十、アンサンブル

「じゃあ、律子はクラリネットね」

母親の奈津子は、モタモタしている律子を見て言った。

「早く、用意しなさい」

遅れてレッスン室に入った途端、母親の奈津子は娘の律子にそう言くと、自分はヴァイオリンを構えた。

大きなレッスン室だった。防音の効いた部屋に置かれた、フルサイズのコンサートピアノが、小さく見える程広い部屋だった。少数の室内管弦楽なら練習出来るように作られた部屋のようなだった。

「駿くんは、ピアノね。三人で、アンサンブルをするわよ。初見くらいは大丈夫よね？」

母親は早口でそう言つて、僕に譜面を渡した。

譜面は手書きで書かれていた。どうやら、オリジナルのようだ。タイトルを見てビックリした。

『奈津子と律子と駿平のアンサンブル』

僕はまたまたビビリまくった。今日の、このために作曲されたものなのだ。しかも、作曲者は「雨宮健一」と署名されている。律子の父親だ。もう、驚くしかなかった。

律子は、父親との関係はどうなのか解からないが、少なくともこの母親とは実に密な意思の疎通が出来ているのは、明白だった。

「さあさ、ピアノの前に座つて、弾いてみて」

母親の奈津子は、ヴァイオリンを構えたまま、僕がピアノを弾くのをワクワクしている様子だった。

僕は楽譜を譜面台に載せて、椅子に座つて調整し、指を鍵盤に置いた。

<ポロン、ポロポロ、……>

僕は、譜面を見ながら弾き始めた。所々に難しい運指があつて多少つまずきながらも、それでも何とか弾けるレベルの曲だった。

多少、細工してるな、という部分は見抜いた。……っていうか、それ位は想像がついたけれど。

律子は、僕のピアノのレベルを、実に的確に、父親と母親に伝えていたのだ。

僕がピアノを弾き続けていると、ヴァイオリンの音が聞こえてきた。母親の奈津子が、待ち切れない様子でヴァイオリンを弾き始めたのだ。

律子はそそくさとクラリネットを組み立てて、音出しを始めた。その様子を見て母親は、ヴァイオリンを止めて、律子に言った。

「律子はさつき、練習したからいいじゃない。さっさと合わせるわよ」

そう言って、母親は律子を呼んだ。

律子はプツと脹れて言った。

「私はいいけど、駿平くんには時間をあげて。初めての楽譜なんだし。お父さん、意地悪してるし」

母親は律子の言葉を無視して言った。

「大丈夫よ。駿くんが弾くのを聞いたけど、全然、問題ないわよ」それからすぐに、母親は僕の方を向いた。

「そうよね？」

僕は楽譜から目を離さず、弾き続けながら答えた。

「ええ、大丈夫です」

母親は得意そうに言った。

「ほーらね、り、つ、こ」

母親の奈津子はヴァイオリンを構えた。

「じゃ、いくわよ。ワン、ツー、ハイ」

母親の合図で、合奏に入った。

初めの一回目は、どうしてもつまづいてしまったが、二回目は、何とか弾き通した。

「じゃ、アーティキュレーションをシツカリとね」

母親はそう言つと、また合奏を始めた。

合奏開始から二時間近くが過ぎていた。

「じゃあ、休憩しましょう」

母親はそう言うと、レッスン室から出て行った。

僕は少々ばてて、クタクタだった。レッスンでもライブハウスでもこんなに長時間、ピアノを弾いたことがなかった。僕は、近くにあったソファにどっかりと腰を下ろした。

「大丈夫？」

律子は、くたばってソファに座っている僕を心配して、声を掛けてくれた。僕の肩に置いた律子の手を、僕は握り締めて言った。

「ああ、大丈夫さ」

律子は自分の手を握り締められていることに気付いていなかったが、紅茶とクツキーをトレイに載せて入ってきた母親は、すぐに気が付いたようだった。

「あらあら、お熱いお二人さんね」

律子は、赤くなって手を引っ込めた。僕は、視線を母親から外した。

「いいわよ、別に。照れなくても」

テーブルに、紅茶とクツキーを置きながら、母親は溜息をついた。  
「私だつてそんな時期があつたわ」

母親は、思い出を探るように遠くを見るような目をした。

「あの人に出会う、もっと前のことだけだね」

言い終わるとさっきまでの表情に戻って、紅茶のポットに目を落とした。

「さ、お茶にしましょ」

僕と律子は、レッスン室の端にある、テーブルの席に着いた。

紅茶を飲みながら、母親の奈津子はブツブツと独り言を言った。

「律子から聞いていたレベルより少し上ね。なかなかいいわよ、駿クン」

奈津子は、僕と律子に構わず喋りまくった。

「でもね、何か引つ掛かるのよ。駿クンの弾き方、何処かで聴いたような……」

奈津子は、額に手を当て、しかめっ面で考え込んでいた。

「思い出せないわ」

僕と律子は顔を見合わせた。

「あ、いいのよ。私の独り言だから」

母親はそう言って、紅茶をすすった。

「今日は楽しかったわ」

僕が玄関で靴を履いている時に、母親の奈津子は満足そうに言った。

「お母さんが言うことじゃないでしょ！」

律子はまた、プツと怒った。

「また来てね。セッションしましょうよ」

母親の奈津子は懲りずに僕に話し掛けた。

「んもう、お母さんったら！」

律子はホントに悔しそうだった。

律子が近くの駅まで送ってくれた。

「今日はごめんね。お母さん、張り切り過ぎちゃってて」

律子がそう言うと、僕はニヤリと笑って言った。

「そんなこと無いよ、楽しかったよ。お母さんとセッションが出来てさ」

僕は横目でチラリと律子を見た。

「お母さんのこと、よく分かったし。律子の家庭が、よく分かったしね」

律子はちょっと照れた。

「ここでもいいよ、送ってくれてありがとう。またな、楽団の練習で僕は、そう言って律子に手を振った。名残惜しそうに、律子も手を振った。

「うん、またね」

律子の、はにかんだ笑顔が可愛かった。

## 十一、師匠

「駿平、もう一回だ」

僕は「ベートーベン・ピアノソナタ五番・第一楽章」を、もう一度弾いた。

照明のトーンが少し落ちた、コンクリート打ちっ放しの壁で、グレーの分厚いカーペットが敷かれた床に、フルサイズのコンサートピアノが置かれた部屋で、僕、戸倉駿平は、ピアノのレッスンを受けていた。

「もう一回だ。もう一回弾いてみる」

繰り返し演奏を指示するのは、師匠である「藤巻要一」であった。

師匠は、ピアノから少し離れたところで、椅子に座り、腕を組んで、タバコをくわえていた。

「えーっ！ 何回弾けばいいんです！？」

僕はつい、そう愚痴をこぼしてしまった。

師匠は、くゆらせたタバコを灰皿でもみ消して、ピアノに近づいてきた。

「いいから、弾くんだ！」

師匠は、先程より強い口調で言った。僕は仕方なく、もう一度弾き始めた。

どうしてなのだろうか。

師匠の機嫌がいつのまにか悪くなった。

レッスンが始まった時は、こんな風ではなかった。いつもの調子で、師匠は僕に声を掛けてきた。

「駿平、元気だったか！」

「今日も下手くそなピアノを聴かせるつもりか？」

「たまにはちゃんと聴かせてくれよ」

そんな冗談からレッスンは始まったのだが、僕が弾き始めたと同

時に、師匠の眉間には深い溝が刻まれ、タバコを急に吹かし始めたのだった。

そして「もう一回弾け」のセリフが出たのだ。

僕が三回目のソナタを弾き終えた時、師匠はピアノの端に両手をついて、下を向いて考え込んでいた。そして、こちらに僕の方に顔を向けた。

「お前、最近、誰かにピアノ教わったか？」

僕は身に覚えが無かった。当然、答えは「ノー」だった。

師匠はまた、突っ伏して考え込んだ。そして前と同じように僕の顔を見た。

「誰かの作品を弾いたか？」

この質問には「イエス」と答えた。ジャズやポピュラーをライブハウスで弾いていたからだ。

「いや、違う！」

師匠の言葉は鋭く、そして師匠の目は厳しかった。

「そうじゃない……。そう、ピアノで何かを弾いたことはないか？」

「それもクラシック系の現代音楽だ」

僕は必死で考え、思い出そうとしていた。

「うーん……」

ほとんど諦めかけた時に、僕はハッと気が付いた。

「あ！ 律子の家かあ！」

師匠は突っ伏して考えていた姿勢から、素早く僕を見返した。

「律子？！ 律子って、雨宮律子のことか！」

師匠の大声に僕は驚き、ビビった。

「雨宮の家に行ったのか？！ そこで何をしたのだ！？」

師匠は捲くし立てるように僕に質問した。

「えーっと、律子の家と呼ばれて。お袋さんと律子と僕とアンサンブルを」

師匠は、そう答える僕の顔を覗き込み、食い入るように僕の言葉を聴いていた。

「親父さんが作曲した、三人のためのアンサンブルの曲、でしたけど」

僕は、師匠の迫力にオドオドしながら答えた。

「お前は何を演奏したんだ？ ピアノか？ トランペットか？ どっちなんだ？」

師匠はさらに迫ってきた。

「え、あの、その、ピ、ピアノ、ですが」

僕がそう言った途端、師匠は振り向き様に、ピアノの縁を「バン！」と叩いた。そしてもう一度、僕を振り返り、僕を指差して、こう言った。

「いいか、駿平！ もう二度と、雨宮の家には行くな！ 分かったなっ！」

師匠はレッスン室を出て行くとしていた。

ドアのノブに手を掛けたまま、振り向いた師匠は、僕に言った。

「今日のレッスンは、これで終りだ。それから、来週はハノンだ。一からやり直す。分かったな」

そう言い終わったか終わらないかのうちに、師匠はドアをバタンと締めて出て行った。

僕はキョトンとしたまま、レッスン室にとり残された。

「師匠、どうしたんだろ？」

僕は訳が分からないまま、しばらくの間ピアノの前で佇んでいた。



## 十二、悩み

「どうしたの？ 元氣ないわよ」

律子が心配そうに、声を掛けてくれたのだった。

吹奏楽団の練習日。それは、律子と会う日でもあるのだ。

いつもと変わらない、同じ練習をしているのだが、どうしても練習に身が入らなかった。だから、冴えないトランペットの音をさせて、コンダクターに注意されたのだ。

もつとも、注意されるのは日常茶飯事なのだが、今日は何度指摘されても僕が直せなかったのだ。

「ああ、大丈夫だよ」

僕はそう答えながらも溜息を付いた。その様子を見て、律子の笑顔が曇った。

「大丈夫には見えないわ。全然、駿クンらしくないよ、それって」

僕は精一杯の笑顔で取り繕った。

「そうかな？ 調子の悪い時もあるよ、僕だってさ」

そう言いながらも、僕の肩はガクリしていた。

律子の励ましに応えられない僕を見て、ホルンの奴がすかさず突っ込んできた。

「おやおや、もうケンカですか？」

ホルンのヤツは律子の顔を見た。

「いつもは仲の良いお二人さんなのに」

そしてホルンのヤツは、また僕の顔を見た。

「穏やかじゃありませんねー。恋人が心配そうにしていますよお」

そう言われて、律子は頬をピンクに染めた。

このアマチュアの吹奏楽団の中では、既に駿平と律子の仲は公認となっているのだった。

律子は美しいクラリネットを響かせるようになり、時々ソロを演奏するようになった。

駿平もハイトーンがキレイに伸びるようになり、超ハイトーンが出そうな程に成長が著しかった。

だが、今日の駿平の音は冴えていなかった。超ハイトーンなど望むべくもない姿だった。

駿平には理由が分かっていた。師匠「藤巻要一」の言葉である。

『雨宮には近づくな！』

それが駿平の心に影を落としていたのだ。

だが、そんなことを律子には言えないし、駿平には言つつもりすら無いのだ。

駿平は律子のことが好きなのだから。

律子の笑顔が自分に向いていることが、一番嬉しいし、楽しいことなのだ。それを手放したくない。駿平の想いはその一念だった。

「大丈夫だよ」

僕は開き直って、笑顔を見せた。

だが、ホルンの奴がまだ突っ込んできた。

「旦那あ、ホントに大丈夫ですか？」

僕は精一杯の笑顔を見せた。

それでも、律子は心配そうだった。

律子にそんな、心配顔をさせたくない。そう思ったら、心の底から力が出てきた。

「律子、大丈夫だよ。心配させてゴメン」

僕は、いつもの僕に戻った気がした。

律子は、そんな僕を見て軽くうなずいた。

「おう、駿平。さっきとは全然違うなー。やれば出来るじゃないか」  
コンダクターがそう言って、僕に声を掛けた。

僕はコンダクターにグッジョブサインを出した。そして、律子の方を見た。

律子はこちらを見て、ニッコリと笑ってくれた。  
その笑顔をいつまでも僕に。

### 十三、共有

「最近、おかしいわ」

僕は、律子の言葉で我に返った。

そして律子に聞き返した。

「え？ 何がおかしいって？」

律子は溜息を吐いて、肩を落とした。

「それをおかしいって言ってるの」

律子はそう言って、溶けかかったソフトクリームをペロリとなめた。

駿平と律子は、日曜日に時々デートをするようになった。

映画を見たり、ファミレスでだべったり、他愛もないデートだったが、それでも律子にとっては目新しく、楽しいひとときだった。

普通の若者が普通にデートする。今までの律子には、そんな時間は許されていなかった。

律子と駿平との仲は、母親の雨宮奈津子はもちろん、父親の雨宮健一さえも黙認していた。

律子は、駿平といるのが楽しかった。

駿平と一緒にいる時は心が和んだ。

律子は、駿平といえる時間を大切にしていた。

だから、余計に駿平の元気がないことに、律子は心を痛めていた。「ちゃんと話して。とつても気になるの」

そう言って律子は、僕の顔を覗き込んだ。

ふと見ると、律子の持っているソフトクリームが溶けて、律子の指の上を流れ落ちていた。

「律子、アイスが！」

僕がそう言っていると、律子は慌てティッシュで手を拭いた。

「あらら！ ずいぶん溶けちゃってたのね」

律子は照れ隠しにニコリと笑った。

ソフトクリームが溶けて、手に掛かっていることに気付かない程、僕を見つめていたのだ。

僕は、律子が進んで心配しているとは思っていなかった。

「解ったよ」

「話すよ、律子にはちゃんと話すよ」

僕はボツボツと話し始めた。

ピアノはハノンからやり直していること。

師匠の藤巻要一に雨宮家には近づくなと言われたこと。

でも、律子と会わないなんて考えられないこと。

板挟みでどうしていいのかわからないこと。

駿平は律子に、思い悩んでいることを素直に話した。

「そだったの」

律子は、宙を見ながら考え込むように言った。

「お師匠さん、どうしちゃったのかわしら？ 私の父や母と、何か関係しているのかわしら？」

僕は、律子を見ながら言った。

「そこがよく判らないんだよ。何か、思い当たることはないかな？」

律子は、右手を顎に当てて考え込んだ。

「うーん、分かんないわ」

「というより、父と母の昔のことは訊いたことがないの」

僕はちよつと肩を落とした。

「そっか……」

問題は、すぐに解決しそうではなかったが、駿平は律子に話をし、少し楽になった。

律子が居てくれてよかったと思った。

駿平は更に律子が愛しくなった。

そして、駿平が正直に話してくれたことが律子には嬉しかった。だが、自分の父親と母親が関与しているとは、思いもよらなかった。

二人は、問題を共有したことで、幸福感を味わっていた。

## 十四、真理

僕は気晴らしに、一人で出掛けた。向うのはいつものライブハウス。

今日は律子と一緒にじゃない。律子は、いつものレッスンだった。律子が初めて来た頃はそうでもなかったが、最近はいつも律子と一緒にだった。

ライブハウスのドアを開けると、マスターが声を掛けてきた。

「よお、駿平。今日は一人か」

僕はちよつと苦笑いした。

「ふられた訳じゃないだろうな？」

マスターは肘でグリグリしてきた。

「違うよ。今日は一人で来たかったんだ」

僕がそう言うと、マスターは怪訝な顔をしたが、すぐにいつもの顔に戻った。

「まあ、いいさ。そんな気分の時もあるさ」

僕はマスターの言葉に反応もしないで、ジャズが演奏されているステージに気を取られていた。

ふと見ると、ピアノには見知らぬ女の人が座って、ジャズのスタンダードを演奏していた。

肩より少し伸びたセミロングの栗色の髪はマッシュレイヤーベースで丸みをもたせたカットに、内巻きと外巻きのパーマをミックスさせたスタイル。

卵形の顔に、クリツとした大きな目が印象的で、左側だけに出来る笑窪が可愛い印象だった。

紺色のパンプスに、黒のタイトスカート、赤のノースリーブのポロのシャツで、ピアノの前に座って弾いていた。

「駿平、気になるか？」

僕はマスターの言葉でふと我に返った。

「え、あ、うん」

生返事してから、僕はカウンターのコーラを飲み干した。

「誰？ 見たことないヒトだけど？」

マスターはニヤケながら言った。

「いい感じだろ。最近、時々来て弾いてくれるんだ」

いい感じでスイングさせて、ベースとドラムをリードしていた。

僕はカウンターに座って、身体を反り返して彼女の弾くジャズに聴き入っていた。

そのあと二曲を演奏した後、彼女はピアノ前を立った。大きな拍手の中、お辞儀してからカウンターに彼女がやってきた。

「マスター、お水をください」

マスターはタンブラーにミネラルウォーターを注ぎながら、ふざけて言った。

「ビールじゃなくて、水でいいのかい？」

彼女は「今日は水がいいのよ」と言っ、マスターからタンブラーを受け取った。彼女はタンブラーをありながら僕の横に座った。

「君ね、マスターお気に入りピアノ弾きは」

彼女はそう言っ、カウンターにグラスを置いた。

マスターが、彼女を紹介してくれた。

「阿川真理さん。アメリカから帰ったばかりだ。向こうで音楽をやっってたんだ」

彼女は右手を振って答えた。

「落ちこぼれよ。何とか卒業できただけ」

マスターは、真理に僕を紹介した。

「戸倉駿平。昔からピアノを弾いてもらってる。いいモノを持つてると思うんだがな」

彼女はタンブラーの水を飲み干してから言った。

「じゃあ、何曲か弾いて。聴かせてちょうだいよ」

そう言っ、真理は微笑んだ。

僕は、ちよつと頬が赤くなった。それから軽くうなずいて、ピ

ノに向った。

まずはクラシックで、モーツァルトの「K四八五・ロンド」を、それからジャズのスタンダード「星に願いを」を、そして最後に「リトル・ルル」を弾いた。

彼女は、カウンターチェアをこちらに向けて行儀よく背筋を伸ばして聴いていた。

僕がカウンターの席に戻ると、真理は拍手で迎えてくれた。

そして、最初のあいさつの時には無かった、優しい笑顔を、真理は僕に向けてくれた。

「駿平くん、上手いわ。あたし、ちよつと感動しちゃった」

僕はちよつと照れた。

最近の行き場の無い想いをぶつけたのだ。その想いが伝わったのがちよつと嬉しかった。

「今度、一緒にやりましょうよ」

そう言つて、真理は僕の腕を握った。

僕は更に照れた。

「『一緒に』つて、どうやって？」

僕がそう言つと、真理は僕の顔を覗き込んで言つた。

「決まつてるじゃない。駿平くんはトランペットよ」

僕は「？」な感じだった。

「なんで、僕がトランペットをやるつて知ってるの？」

真理は気まずい顔をしながら、マスターを見ながら言つた。

「だって、マスター、そんなことを言つてなかった？」

マスターは驚いた表情だった。

「駿平がペットやるなんて初めて聞いたぜ」

マスターは（どうなつてんだ？）という調子で駿平に詰め寄つた。

「俺は知らなかったぞ。ペットなんて出来るのか？」

マスターは既に違うことを妄想していた。

「そうか、駿平がペットかー。面白いぞ、うん！」

真理はごまかすように言つた。

「ほ、ほら！ マスターもああ言ってることだし」

そう言って、真理は僕にしがみ付きながらウイंकをした。

僕は微妙な違和感があった。だが、真理があまりにも積極的だったので、思わず僕はうなずいてしまった。

「あ、ああ、分かった。いいよ」

僕がそう言つと、真理は来週の金曜日を指定した。金曜日は楽団練習日だ。そして律子も付いて来るはずだ。

「金曜日は……」

そう言い掛けた僕を、真理は制止して言った。

「どうせ『遊び』なんだから、軽く考えてよね。じゃあ、来週ね」  
そう言い終わると、真理はライブハウスを出て行った。

僕は啞然としていた。

僕の横にマスターがさりげなく、静かに座った。

「モテる男はツライねー」

マスターは僕の腕を突つついた。

「律子ちゃん、どう思うかな？」

マスターはそう言つて、僕の肩を叩いた。

僕の肩は、マスターに叩かれる前に、ガックリと落ちていた。

ライブハウスで気晴らしのつもりが、僕には、更に悩みが増え  
てしまった。



## 十五、過去

日曜日、律子の家に行った。

師匠の「藤巻要一」から、雨宮家に行くのを止められていたが、師匠の真意を探りたいという想いがあつた。

それよりも、律子と一緒に居たいという気持ちの方が大きかったのだが。

いつもの通り、父親の「雨宮健一」は不在だった。

いつもだったら三人でセッションをするのだが、今日は止めた。

師匠に止められているので、それだけは守らねばならなかった。話をする位なら許されるだろうと僕は考えたのだ。

一番ガツカリしたのは、母親の奈津子だった。奈津子は、このセッションをなぜか心地よく感じていたのだ。奈津子の楽しみでもあったのだ。

「あーら、残念。その師匠さんも厳しいわね」

僕は、母親の奈津子にその様子を話した。

「うちの師匠、あんなに怒つたのは初めてなんです。『雨宮の家には行くな！』って凄い剣幕でした」

母親の奈津子も困った表情をしていた。

「うちで弾いちゃダメってどういうことなのかしら？」

僕は、母親の奈津子に聞いてみた。

「師匠の名前は『藤巻要一』っていうんです。心当たりありませんか？」

その名前を聞いた途端、母親の奈津子の動きが止まった。そして、ティースプーンをカチャカチャと音を立ててソーサーに置き、震えるようにして、紅茶をすすった。

母親の奈津子は、明らかに動揺していた。その様子を見て、律子が言った。

「お母さん、どうしたの？　なんか変よ」

母親の奈津子は、ティーカップを両手で抱えたまま、独り言のように、か細くて小さな声で一言呟いた。

「あの人、戻ってたのね。ピアノ、教えてたのね」

母親の奈津子は、震える手でカチャカチャと音を立てながらティーカップを置いた。

「そうだったの。だから何処かで聴いたことがあると思ったはずだわ……」

いつも気丈な奈津子だったが、動揺を抑えきれなかった様子だ。

「ごめんなさい。ちよつと気分が悪いから席を外すわ。駿クン、ゆつくりしていつて。律子、後はお願ひね」

そう言い終わると、席を立ちフラフラしながら応接間を出て行った。

僕と律子は、顔を見合わせた。

「どういうことなんだ？」

律子も首を振った。

「解らないわ」

二人は狐につままれた感じだった。どうも要領を得ないでいた。

「お母さんの口ぶりでは、師匠さんを知ってるみたいね」

「そうだな」

「昔、何かがあつたのかしら？」

「たぶん、そうだろうな」

それだけしか解らなかった。

ただ、明るくてたくましささえ感じる母親の奈津子が、気分を害してしまうほどの出来事が隠されていることだけは間違いなかった。

「それ以上は解らないわね」

「ああ、僕らにとっては過去の闇の中さ」

僕と律子は、途方に暮れていた。

駿平が帰った後、律子は母親の奈津子の部屋をノックした。

「どうぞ、入って」

律子が入ると、母親の奈津子はベッドで横になっていた。

「ごめんなさいね、お相手できなくて」

律子はベッドの端に座って、母親の手を握った。

「うっん、いいのよ。それに、駿平は私のボーイフレンドなんだから」

奈津子は微笑んだ。

「そうね、そうだったわね」

「でもね、彼のピアノを聴いているとそんな感じがしなかった」

「昔の彼が弾いているようだったのよ」

律子は、眉間にシワを寄せた。

「昔の彼？」

奈津子は右手を額に当てながら話し始めた。

「ええ、そう。藤巻要一は昔の彼氏だった」

律子は、母親の衝撃的な発言に驚いた。だが、律子の様子などお構い無しに、奈津子は話し続けた。

「今の、駿クンと律子のように、いえ、もっと仲が良かったわ」

「私達は、共に高め合っていた、人間的にも音楽的にも」

奈津子の表情が少し曇った。

「だけど、藤巻は突然、私の前から姿を消したの」

「何も告げず、さよならさえも無かったわ」

「ホントに突然よ。昨日まで逢っていたのに！」

奈津子の頬を涙が伝った。

「悲しかったわ。辛かったのよ。だから音楽に打ち込んだわ」

「それからあのひと、雨宮健一と結婚して今の地位を築いたの」

律子は母親の手をさすりながら、相槌を打った。

「……そうなの。知らなかったわ」

「ごめんなさい、辛いことを思い出させて」

奈津子は涙を拭いながら起き上がり、律子の肩を抱いた。

「いいえ、そうじゃないのよ」

「お母さん、昔を思い出して楽しかったのよ」

「ただ……」

律子は尋ねるように復唱した。

「ただ？」

母親の奈津子は、律子に微笑んだ。

「ただ、名前を忘れていただけよ」

そう言って母娘は抱き合った。

## 十六、告白

「定期演奏会まで、残り時間が少ない」

市民吹奏楽団の団長が珍しく姿を現して訓示を垂れた。

「なのに、仕上がり具合は今ひとつに感じられる」

「各自、モチベーションを上げて練習に臨むように」

そう言つて、団長は楽団員を見回した。

「はいっ！」

楽団員全員の返事が練習室にこだました。

指揮台には、団長と入れ替わつて主席指揮者が立つた。

「皆さあん、大丈夫ですよ」

「ちゃーんと出来ていますからあ」

ちよつと女形の入った指揮者だが、音楽の知識とセンスは抜群で、コミカルな話法で人を引き付ける力があり、それが指導力の一部になっている。

「じゃあ、最初の曲、いきまあす」

指揮者は、タクトを振り下ろした。

練習の中休み、楽団員は自販機の前で、カップを抱えながら談笑していた。

その中に、雨宮律子と戸倉駿平もいた。

「そうか、お母さんがそんなことを」

僕は、口を固く結んで考え込んだ。

律子は、カップを両手で抱えてゴクリと一口飲んだ。

「そうなのよ。お母さん、ちよつと寂しそうだった」

駿平のピアノの師匠である藤巻要一は、律子の母親である雨宮奈津子の昔の彼氏だったのだ。

律子は、そのことを母親の奈津子の口から聞かされた。

しかも、何の前触れもなく突然別れたということも語られたのだ。

った。

「師匠はそんな人じゃないと思うけどな」

僕はレッスンの様子を語った。

「いつも親父ギャグ連発の冗談ばかりだぜ」

「僕の話なんか、マトモになんか取り合わないよ」

「でも、ピアノの指導はツボを押さえてるよ」

律子は「ふん」と聞いていた。

「でも、レッスン以外のことは何も知らないし、分からないな」

「師匠のレッスン室に行ってレッスンするだけだから、何処でどんな生活をしていたかなんてことはサッパリ……」

僕が言い切る前に、律子は僕の顔を見て言った。

「全然知らないのね」

僕はカップのコーヒースをすすりながらうなずいた。

律子は、溜息をついた。

「さあ、時間だぞー！」

「後半の練習、始めますよぉー」

パートリーダー達の声が響いた。

律子と駿平は腰を上げた。

「終わってから、いつもライブハウスで話そうよ」

僕がそう言うと、律子はうなずいた。

駿平は「ライブハウス」という言葉に違和感を覚えた。

だが、どうして違和感がするのか、すぐに気付かなかった。

## 十七、セッション

楽団の練習が終わった僕と律子は、練習場を出た。そして、いつものライブハウスに向った。

「お母さん、駿平との演奏で昔を思い出していたんだって」

ライブハウスに着くまでの間、休憩時間に話していたことを繰り返した。

律子は、白のポロシャツに、ピンクのニットカーディガン、ベージュのタイトスカートに、ローヒールの白いサンダルで、清楚な感じだった。

「楽しかったって言ってたわ」

律子はしみりと話した。

「デジャヴな感じだったんだろうか」

僕は母親の奈津子の心情を想像して言った。

「でも、スッカリ名前を忘れていたらしいわ。心の中で封印していたのかもしれない」

律子がそう言うと、僕は額に手を当てて、師匠を思い出しながら考え込んだ。

話しながら歩いてきたので、あっという間にライブハウスの前まで来ていた。

ぼくは、入り口のドアを開けた。

マスターが声を掛けてくれた。

「よお、駿平。いらっしやい、律子ちゃん」

マスターの挨拶の違いに、僕は苦笑いした。そして、マスターは一言付け加えた。

「来てるよ、真理さん」

そう言われて、僕は固まった。

そっだ、そっだった！

僕はすっかり忘れていたのだった。

「ライブハウス」という言葉の違和感はこれだったのだ。

「真理、さん？」

律子は呟いたが、僕は律子の手を引つ張って店の中に入った。カウンターに真理が座っていた。

真理は目ざとく僕を見つけて手を振った。

「駿平くん、こっち、こっち！」

大きな声で、真理は僕を呼んだ。

真理は、赤のサテン調シャーリングチューブキャミに、黒のローライズストレートパンツを穿いて、赤のハイヒールを履いていた。

「あら、今日はお友達と一緒になのね」

僕は、顔をひきつらせながら紹介した。

「僕のガールフレンドの、兩宮律子さん。吹奏楽団でクラリネットをやってて……」

僕が言い切る前に、もう知っているような口ぶりで、真理は答えた。

「あたし、阿川真理って言います。時々、ここで駿平くんとセッションしてます。よろしくね」

そう言つて、真理は右手を出して、律子に握手を求めた。

真理の顔はにこやかな表情をしていたが、その目は全然笑っていなかった。

律子はおずおずと右手を出して軽く握つて言った。

「ど、どうも。よろしく」

律子の顔は、キツネに摘まれた不思議な顔をしていたが、明らかにちよつと不機嫌な感情が表情に入り混じっていた。

「まだ、セッションなんてしてないよ！」

僕はちよつと不機嫌に言った。すると、真理は舌をペロツと出しながら言った。

「今日、これからするのよね。それで、トランペットは持ってきた？」

僕はそんなつもりでなかったし、それ以前に真理とのセッション



のことなどすっかり忘れていたのだ。

「持ってたなかったよ」

僕は無愛想に答えた。

真理は目を輝かせて、僕の顔を見た。

「思った通りだわ。そうじゃないかと思って、あたしが用意したわ」

真理は足元から、黒い大きなカバンを持ち上げた。それはプロテックのトランペット用のトラベルセミハードケースだった。

真理はそのトランペットケースを僕に渡した。

僕は仕方なく、ケースのジッパーを開けた。中からは、シルキーのB五・GPが出てきた。

「これは！」

僕が叫ぶと、真理はニツコリ笑って言った。

「いいのよ、好きに使って」

「持って帰ってもいいけど、ここへ来る時は持って来てね」

「あたしとのセッション専用って訳」

真理は、紙切れをトントンとさばいてから、それを僕に渡した。

「これが楽譜よ。十曲ほどあるわ。でも、今日は最初だから一番上の一、二曲だけ、やりましょ」

真理はステージの方へ歩き始めた。

「楽譜を見てさらっておいて」

そう言い終わると、真理はピアノの前に座った。そして、ベースとドラムでセッションを始めた。

僕は楽譜に目を落とした。その楽譜を、律子も覗き込んできた。

僕はその時まですっかり律子のことを忘れていた。真理に圧倒され続けていたのだ。

「あ、ごめんね。ビックリさせちゃって」

僕は律子に優しく話し掛けた。

「この前、初めて会って、セッションやろうって」

僕の言葉は、ちよっと空しく響いていた。

「マスターもお勧めの人だからさ」

僕は自分でも言い訳っぽさを感じながら、律子に話しかけた。

律子は、僕の言葉よりも楽譜から目を離さなかった。

何枚か楽譜をめくって、じーっと眺めていた律子がポツリと言った。

「これ、お父さんの書く音符だ」

僕は「え？」という感じだった。それからもう一度、楽譜に見入った。

「うーん、そう言われればそんな感じもするなあ」

律子は、いつになく真剣な硬い表情をしていた。

そして、ステージ上のピアニストを凝視して、鋭く吐き捨てるように言った。

「これって、どういうこと?!」

僕はなんと言っているのか、解からなかった。辺りをキョロキョロするしかなかった。

## 十八、嫉妬

僕は軽く音出しをして楽曲をさらった。

さすがに、僕の欲しがっていたシルキーのB五だ。いい感じの吹奏感だが、金メッキは伊達じゃない。響かせるのは難しかった。

だが、真理は何処で聞いたのだろう。マウスピースは、バックの3Cだった。僕がいつも愛用しているマウスピースだ。しかもインナーGPタイプである。

トランペットやマウスピースには違和感はなかったが、いろんなことで合点がいかないことが多すぎる。どうして僕の欲しがっているトランペット、そしてマウスピースのタイプを知っていたんだ？僕がこの状況のついて考え込んでいたら、真理はピアノの前に座って手招きしていた。

僕は楽譜をわし掴みにすると、ステージへ向った。

真理とのセッションが始まった。セッションと言ってもアドリブはない。楽譜もコードだけが書かれている訳じゃなかった。だが、雨宮健一らしく、ちよつと工夫があった。

一曲のつもりだったが、お客さんのリクエストで、もう一曲だけ演奏した。

何しろ、全くの初見の楽譜である。上手く吹けつてのが無理に近いのだ。なんとかごまかしながらの演奏だった。演奏が終わった時にはもうヘトヘトだった。

カウンター席に戻ると、律子が拍手と笑顔で僕を迎えてくれた。

「ブラボー。素敵だったわ」

僕は、律子に笑顔を返した。それから、マスターも声を掛けてくれた。

「駿平のペット、なかなかいいじゃないか」

マスターは、超ご機嫌でニヤニヤしていた。

「今度は、俺のベースとセッションだぞ」

僕は、マスターにグッジョブサインを出した。真理がステージから慌てて駆けて来て僕をハグした。

「駿平、最高だわ！ いい音、響かせてくれたわね。ホントに良かった」

真理の目の色は、先程とは違っていた。感動にあふれている感じだった。

「あたし、駿平が気に入ったわ。今度はちゃんと練習してやりましょうよ」

そう言っただけで、僕の手をぎゅっと握ってきた。

「ね？ 決まりね。連絡手段は、っと……」

真理は、僕の携帯電話を取り出させて自分の番号を入力した。着信状態にさせてから電話を切った。

「これで、OKね。じゃあ、ペットは駿平が管理してよね」

そう言い終わると、真理は楽譜を片付けた。

「あたしはこれで失礼するわ。また連絡するわね」

そう言っただけで、真理は店を出て行った。

真理は一陣の風の如く、強引であつという間に去って行った。

僕はポカンと突っ立っていただけだった。

「……って、駿平ったら！」

律子が声を掛けてくれた時に我に帰った。

「あ、ああ、ごめん」

律子は、かなり不機嫌で怒っていた。

「何なのよ、あの人！」

「ちよつと、駿平に馴れ馴れしいわ」

「一体、どーゆー関係？」

僕は答えに窮した。

「えつと、あの、どう言ったら……」

シドロモドロな僕に、マスターが助け舟を出してくれた。

「律子ちゃん、ごめんね。駿平とは何の関係もないんだよ」

「うちの店でピアノを弾いてくれるんだ、あの人」

「それで、駿平を紹介しただけなんだ。それだけなんだよ、ホントだよ」

それでも、律子は僕を藪睨みした。

「ホントオ？」

僕は真顔で答えた。

「ホントです、マスターの言う通りです」

僕は上目遣いに律子の顔を覗いた。

律子はまだ、ふくれていた。

「律子お・・・」

僕がそう言つと、律子はじろりと睨んだ。

「なによっ！」

僕は恐る恐る言つた。

「ひよつとして、嫉妬？」

律子の顔が急に真っ赤になって、僕の背中や肩をパンパンパンと叩いた。

「ち、違つわよっ！ もぉー！」

そこへマスターが、コーラを二つ持ってきた。

「はい、はい、そこのお熱いお二人さん。これ飲んで、頭冷やしてね」

そう言い残して、マスターは去っていた。

僕と律子は、顔を見合わせてプツと吹いた。

そして、二人でコーラで乾杯した。

## 十九、密談

とあるスタジオで、阿川真理はピアノを弾いていた。

ショパンのエチュードを弾き終えた真理は、ジャズのアドリブフリーズを弾き始めた。

しばらく弾いたところで、一人の男がスタジオに入ってきて拍手をした。

「阿川君、上手くなったね。見違えたよ」

真理は途中で弾くのを止めて、男の顔を見た。

「アメリカですい分勉強したようだね」

スタジオに入ってきた男はそう言った。

「ありがとうございます。雨宮先生直々のご教授のお陰です」

その男は、雨宮健一だった。

「再来月には録音に入るそうじゃないか。ついにデビューだね」

真理はうつむいて頬を染めた。

「まだまだ、先の話です」

雨宮は誇らしげに言った。

「何を言っているんだ。世間は君を認めてるんだよ。自信を持ちなさい」

顔を上げた真理はうなずいた。

「ええ、そうですね」

雨宮はピアノの縁に手を掛けて言った。

「そんな忙しい時に変なことを頼んでしまったな」

真理は嬉々として言った。

「そんなことはありませんわ。私自身、興味が湧いてきましたから」  
雨宮は少しホッとした様子だった。

「慣れない役回りだから難しいとは思うが、何とか律子に『憂い』を教えたくてね」

真理の顔が少し曇った。

「それを思うと、ちよつと胸が痛みますわ」

雨宮はキリツとした顔で言った。

「いや、これは必要なことなんだ。奈津子もそうして会得してきたんだから」

真理はそれでも浮かない顔をしていた。

雨宮は話を少し逸らした。

「ところで、戸倉駿平はどうだね？ 面白い『素材』じゃないかね？」

真理の顔は、急に嬉々としてきた。

「ええ、彼はいいモノを持っています。私自身、指導してみたいと思います」

雨宮はニヤリとした。

「いいんだよ、指導しても。その段取りは、もう付けたんじゃないのかね？」

真理はちよつと赤くなった。

「よくご存知ですね。先生の計画通りに進めているだけですけど」

雨宮は、フフフと笑った。

「まあ、いい。ところで、戸倉君の指導は誰か、知っているか？」

真理は首を横に振った。

「藤巻だよ。藤巻要一」

真理はビックリした。

藤巻要一のピアノを聴いたのがキツカケで、真理は音楽を目指したからだった。

「え？ あ！ そうなんですか。……だから、私、彼のピアノに心が動いたんですね」

真理は感慨深げに言った。

雨宮は更に話題を変えた。

「戸倉君に例のモノは渡したのかね？」

真理は、気持ちを切り替えた。

「ええ、渡しました。喜んでいたというよりビックリしました」

雨宮は無表情だった。

「律子から聞いた情報だ。間違いはないよ」

雨宮はニヤリとした。

「私からのプレゼントだよ、プレゼント」

真理は、雨宮の表情がちよつと悲しかった。

今度は真理が話を変えた。

「トランプットを渡した時、律子さんに会いました」

雨宮は真理の顔を見た。

「そうか、会ったのかね。今の娘は『恋する乙女』だったろう」

真理は探るように雨宮に言った。

「ホントに戸倉君のこと、好きのようですね。仲睦まじくて羨ましいって感じてした」

雨宮は興味無さそうに言った。

「今はそれでいい。だが、それだけではダメなのだ。『清姫の憂い』が必要なのだ」

それだけを吐き捨てるように言うと、雨宮は振り返ってドアに近づいて行った。

「時々、報告を頼む」

雨宮は後向きでそう言つて、スタジオを出て行った。

真理はしばらくドアを見つめていた。

そしてピアノの前に座った。

「戸倉、駿平……か」

真理は、鍵盤の上に指を置いた。

「当て馬だなんて……」

真理は、何事もなかったかのように、再びピアノを弾き始めた。



## 二十、演奏会

「開幕まで、あと十分です。楽団員は楽器を持って舞台袖に移動してください」

コンサートマネージャーの声が控え室に飛んだ。

市民吹奏楽団は、定期演奏会の日を迎えた。

その定期演奏会の開演を前にして、市民文化センター・大ホールの控え室は緊張に包まれていた。

舞台袖までの移動途中で、律子は僕に話し掛けてきた。

律子が不安げな顔をして言った。

「やっぱり、緊張するわね」

僕は誇らしげに切り返した。

「そうかな？ この服を着たら、ビシツとしたけど」

僕はユニフォームに着替えたなら、気持ち引き締まった。黒のスラックスに白のサテンのシャツ、

そして紺色のブレザーが楽団のユニフォームだった。

「律子こそ、コンクールで慣れてるんじゃないの？」

僕の言葉に、律子は首を横に振った。

「うっん、全然。いつも、いつも、緊張の連続よ」

よく見ると、律子の右手が震えていた。

僕は、律子の肩をつかんだ。

律子は、つかまれた拍子にビックリした表情で、僕の顔をジッと見つめた。

「大丈夫さ。律子なら」

僕は、そう言って律子にグッジョブサインを出した。

それを見て、律子はニツコリと笑った。

「今日、お母さんは？」

僕は律子に聞いた。律子の答えは予想通りだった。

「今日を楽しみにしてたから、きつと来てるわ」

僕は、更に聞いた。

「お父さんは来ないよね？」

律子は引きつった顔をして言った。

「ええ、たぶん来ないと思うわ」

「駿平の方はどうなの？」

律子が聞き返してきた。

「両親は来るって。それに師匠も誘った」

律子はちよつとビックリしたようだった。

「え？ 師匠さん、来てくれるの？」

僕はスマイルで答えた。

「うん。両親が挨拶したいからって、無理やり来てくれって頼んだ」

「来るかどうかは五分五分だけどね」

舞台袖に来たところで、マネージャーの声が飛んだ。

「パートごとに整列してください」

僕と律子は小さく手を振って整列した。

「舞台に入りまーす」

マネージャーの声と共に、列が動き始めた。

律子は、舞台下手の最前列、指揮者の前の席で、僕は後段の真ん中の席だ。

共にファーストでパトリリーダーなので、中央寄りの席である。

律子の位置からだ、指揮者で客席が見辛い、僕の位置だと、広範囲の客席が見渡せた。

演奏の合間のMCの時に、客席をチェックした。

律子の母親、奈津子は律子がよく見える位置、下手の前の方の席に座っていた。

僕の両親は、中央で通路の少し上だった。

師匠の姿を探したのだが、なかなか見付からない。

もう来ないと諦めかけた第二部の二曲目の時、下手の一番後ろの席に座っているのが確認できた。

アンコールも滞りなく終わって、客出しとなった。

楽団員は、ロビーのコンコースに並んで、お客さんを見送りつつ、自分達のお客さんに挨拶をした。

律子の母親と僕の両親がすぐにやってきた。

「律子、よかったわあ」

そう言って母親の奈津子が花束を渡してくれた。

「わあ、キレイ！　ありがとう」

律子は、僕の両親からも花束を受け取っていた。

僕は、キョロキョロして師匠を探した。師匠は、客出しの渋滞に巻き込まれていた。

「師匠ーっ！」

僕がそう叫んで手を振ると、師匠は僕を見つけて寄ってきた。そして、両親に挨拶をした。

その時だった。

律子の母親、奈津子が師匠である藤巻の腕をつかんだ。

藤巻はビクツとして奈津子の顔を見た。

奈津子の目からは涙がこぼれていた。

「要ーさん！」

かすれた声で、奈津子はそう叫んだ。

藤巻は、こうなることを悟っていたようだった。

奈津子に丁寧な挨拶をした。

「お久しぶりです。ご無沙汰しておりました」

そう言って、藤巻は深々と頭を下げた。

奈津子は、ハンカチを口に当てて、一言を搾り出すのが精一杯だった。

「あ、あ、あ、逢いたかったわ」

## 二十一、スタジオ

その電話は、部屋でくつろいでいた僕とビックリさせた。

「あたしよ、判る？」

電話に出た僕は、電話の相手が誰だか、すぐに判った。

「阿川さん、ですよね？」

真理は、高い声で嬉しそうに答えた。

「覚えててくれたのね。嬉しいわ」

だが、真理の声は急に低くなった。

「ところで、明後日の土曜日は空いてる？」

僕はスケジュール帳を見るまでもなく、顔をしかめた。

「土曜日はちよっと……」

僕は言葉を濁した。その答えに真理は、ちよっとむくれた。

「練習するって言ったでしょ」

そして、真理は少しだけヒステリックな言い方をした。

「土曜日の午後、どうしても空けてよ！」

僕は唸った。土曜日は律子とデートの約束だったのだ。

僕がずーっと黙っていると、真理は懇願するように言った。

「お願いよ、どうしても聞き入れて欲しいの」

真理は声のトーンを更に低く変えた。

「理由はね、スペシャルゲストが来るのよ。その人に、どうしても

駿平のペットを聴かせたいのよ」

僕は、それが意味が分からなかった。だが、僕のペットを聞かせ

る相手とは誰なのかが気になった。そして、おずおずと訊いてみた。

「スペシャルゲストって、誰ですか？」

真理は（しめた）と思って途端に元気になった。

「桜沢宗和よ」

僕は色めき立った。僕の知らない名前ではなかった。というより僕の憧れだったのだ。

「え！ アメリカで売り出し中の……、あのジャズトランペッター！」

真理は得意そうに言った。

「ええ、そうよ。来日公演のオフ日なんだけどね、面白そうだって来てくれることになったの」

僕はドキドキして、ついこう口走った。

「桜沢さんに逢えるんですか！」

僕の、その反応を聞いた途端に真理は声色を使った。

「どお？ これでも予定、空けられないかしら？」

僕は一も二も無く即答した。

「行きます、行きます！」

真理は勝ち誇ったようにしゃべり始めた。

「土曜日の午後二時に、Nスタジオに来てね。じゃあ、待ってるわ」  
そう言い終わると真理からの電話は切れた。

僕はしばらく、その余韻に酔いしれた。

「桜沢宗和、かー」

「彼の喇叭が聴けるんだー」

「そして、彼と一緒に吹けるんだー」

僕はしばらくボーツとしていたが、しばらくして興奮が冷めてくると、改めて大変な事態に気付いてきた。

『ダブルブッキング』である。

律子とデートか、それともジャズトランペッターの桜沢宗和か。どれだけの時間、悩んだらう。数秒だったか、数分だったか、分からない。

僕はいつの間にか、律子に電話を掛けていた。

「あ、律子？ 駿平だけど」

「あの子、今度の土曜日なんだけどさ」

「うん、そう、デート、だよな」

「急に用事が出来ちゃってー」

「うん、……そうなんだ」

「……うん。どうしても抜けられないんだ」

「ごめんね。ホントにごめん」

「今度、埋め合わせするから」

「じゃあ、また」

僕は、深い罪悪感の中にズブズブと沈んでいく自分を見出していた。

土曜日の午後、僕はNスタジオに向かっていた。

真理に管理するように言われたトランプットを持って。

受付で名前を告げると、二階の三番スタジオだと教えてくれた。

スタジオのコントロールルームに入ると、既に二人はスタジオの中でセッションを始めていた。

マネージャーらしき人が、僕に声を掛けてきた。

「戸倉駿平くんだね。ちょっと、ここで待っていてくれる？ もうすぐブースから出てくるから」

そう言っただけでマネージャーは、壁際のソファへ座るよう案内してくれた。

それから十分ほど、途切れることなく演奏が続いた。

目の前に、憧れの桜沢宗和がいる。

しかも、聴いているのは数える人達だけ。

そう考えると、鳥肌の立つような興奮に包まれた。

音楽が鳴り止むと、重いブースの扉が開いて、真理と桜沢が出てきた。

「お疲れ」

「最高だったよ」

マネージャーやエンジニアが二人に声を掛けた。

真理は目ざとく僕を見つけると小走りに近寄ってきた。

僕がソファから立ち上がると、真理は僕をハグした。

「駿平、よく来てくれたわ。待ってたのよ」

真理は、振り向いて桜沢に僕を紹介した。

「こちら、さつき話した戸倉駿平くん」

僕は、モジモジしながら頭を下げた。

「あ、は、初めまして。戸倉と言います。お会いできて光栄です」

真理は更に付け加えて言った。

「いい音を聴かせてくれるのよ」

桜沢はニヤリと笑って僕に握手を求めてきた。

「桜沢です。よろしく」

僕はもう恍惚状態だった。

「阿川から聞いたよ。ずい分と気に入られたんだね」

僕は少し照れた。

「じゃあ早速、一緒にやってみよう。雨宮先生の楽譜だったよね、阿川？」

真理は罰の悪い顔を一瞬したが、すぐに笑顔に戻って返事をした。

「ええ、そうよ」

桜沢は、僕をブースへと誘った。僕は、楽器を取り出し楽譜を抱えてブースの中に入った。

スタジオでは、ほとんど個人レッスンのようだった。

桜沢は丁寧に、しかし厳しい声も掛けて、僕をうまくリードしつつ、僕を伸ばそうとしていた。

コントロールルームでは、密かな話が進んでいた。

まず、エンジニアが喋った。

「彼、音響的にいいモノを持つてるね。音の輪郭がハッキリしている。それでいてメロウな部分もちゃんとある」

今度は、マネージャーが喋った。

「あの子、ルックスはいいよね。ピアノも、そこそこ弾けるんですよ。美味しいかも」

真理は、ガラス越しの駿平を見ながら言った。

「雨宮先生の頼みだったので渋々だったんだけどね」

真理は頭を振った。

「雨宮先生は昔からやり手で通ってたけど、娘の為に娘の恋人を横恋慕しろだなんて」

真理はフツと息を吐いてから言った。

「ちよつと信じられなくなつたわ」

真理はもう一度、溜息を吐いてから話を続けた。

「でもね、彼に会って彼の演奏を聴いて気持ちが変わつたわ。彼を私のバックに付けたいと本気で思ったのよ」

マネージャーがボソリと呟いた。

「全く、真理さんも我がままなんだから」

マネージャーは、エンジニアと顔を見合わせながら呟いた。

「でも、いい素材であることは間違いないね、うん」

真理はマネージャーを見てニヤリとした。

マネージャーも真理と目が合った瞬間、ニヤリとした。

四十分が経過したところで、桜沢は僕に声を掛けた。

「唇がツライだろ。少し休憩しよう」

僕はそうでもない感じだったが、ペットを口から外すと唇がジンとした。

ブースの中から出てきた桜沢はこう言った。

「阿川、彼をアメリカに連れて帰っていいかい？」

真理は慌てた。

「ダメ、ダメ。ダメよ！ 私が先よ」

桜沢はニヤリとして苦笑した。

「やっぱり、ダメか」

僕は、異常に照れ臭かった。

しばらく雑談をしていたが、真理は痺れを切らしたように言った。

「さあ、セッションよ、セッション」

真理はエンジニアを振り返って言った。

「ちゃんと録音してちょうだいよ。それもとびっきりの音でね」  
エンジニアは真理に敬礼した。



「了解。バツチリ録りまつせ」

真理は僕を見て微笑んだ。

「さあ、楽しい音楽の始まりよ」

三人はブースの中に消えて行った。

## 二十二、晴天の霹靂

「また音色が冴えてきたね」

雨宮健一は、律子にそう告げた。

律子は、黙々とシヨパンのエチュードを弾いていた。

「嫉妬の気持ちがよく出ているよ」

そう言われて、律子はミスタツチした。

「いいねえ。動揺してるところがもつといい」

健一は嫌味としか意味が取れない言葉を吐き続けた。

律子は弾き終えると、溜息を吐いた。

そして、父親の健一を睨んだ。

「おっと。そんな目を向けるとは。さては、戸倉君にふられたのか？」

律子はピアノをバンツ！と叩いた。

「そんなんじゃないわ！」

健一は、ニヤリと不敵な笑いをした。そして、軽くうなずいた。

「そうか、『まだ』そうではないのか」

律子は、健一の言葉に首を傾げた。

「『まだ』って？」

律子は健一を睨みつけた。

「それ、どういう意味？」

健一は、咳払いをしてごまかした。

「いや、他意はないよ。ちよつと言い間違えたただだよ」

あくまでも優しいトーンで、健一は話をした。

「そろそろ、コンクールの準備をしなくてはね。いつまでも生温いことをやってはいけけない。土曜日、場所を変えてレッスンをしよう」

律子の表情は暗くなった。

その様子を見て、すかさず健一は言った。

「どうした？ 浮かない表情だね。土曜日はダメなのか？」

土曜日は、駿平とデートのはずだった。だが、駿平が断ってきたのだった。律子はそれを思い出していた。

「大丈夫です、空いてます」

その言葉を聞いて、健一はほくそえんだ。

「じゃあ、Nスタジオでレッスンをするから」

律子はコクリとうなずいた。

土曜日のお昼、律子は健一と一緒にNスタジオに入った。二階の二番スタジオでレッスンだった。

健一はいろんな曲を、律子に初見で弾かせた。

古典派のハイドン、モーツァルト、ベートーベン。

ロマン派のシューベルト、ショパン、スクリャービン。

近代のラヴェル、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ。

「どれもシツクリこないな」

健一は首を傾げながら、様々な楽譜を律子に弾かせた。だが、律子にはコンクールの選曲しているようには思えなかった。いつもの健一なら、こんな手間は掛けないはずだった。ただ、闇雲にピアノを弾かせているようにしか、律子には感じられなかった。

五時間もピアノを弾いていた律子には、明らかに疲れが見えていた。

その時、健一の携帯電話に着信が入った。その着信音を聞いた健一は、律子にこう言った。

「疲れただろう。廊下で休憩するといい」

律子は無言でピアノの前を去ってスタジオを出た。二階のロビールの自販機でジュースを買い、近くのソファに座って飲んでいた。

律子がロビーでしばらく佇んでいると、隣のスタジオから人が出てきた。

書類カバンを持った男とセミロングでワンピースの女性、そして楽器ケースを持った男が二人だった。

二人の楽器は明らかにトランペットで、一人は派手な服を着ていた。もう一人は学生風の何処かで見覚えのある服だった。学生風の男は、どこかで見覚えのある、プロテックのトラベルセミハードケースを持っていた。そして、セミロングの女性と腕を組み、手をつないで、仲良さそうに話をしていた。

その学生風の男を見て、律子は紙コップを落とした。  
そして、大きな声で叫んだ。

「駿平！」

律子は、思わずソファから立ち上がった。

「駿平がなんでここに居るのよ！」

その声に気付いた駿平は、振り返った。

駿平には青天の霹靂であった。

駿平は、この世の物ではないモノを見るような目で律子を見つめ、口をパクパクとしていた。

「え、あ、なに？ どういうこと？」

腕を組み、手をつないでいたセミロングの女性も、こちらを振り返った。

律子は、それが阿川真理だとすぐに分かった。

「え?!」

律子の顔からは、血の気が失せていた。

「なんで!?! なんで阿川さんと一緒なの!?!」

真理はビックリしていなかった。むしろ、薄ら笑いさえ浮かべていた。そして、わざとらしく駿平の腕にしがみ付いた。

「あら、駿平の『お友達』の律子さんじゃない」

真理は平然と答えた。

「どうしたの、こんなところで？」

そして真理は、律子に流し目で究め付けの台詞を吐いた。

「まさか、駿平を追っ掛けてきたのかしら？」

律子は、真理の言葉が終わらないうちに、駿平の前を走り去り、階段を駆け下りて行った。

律子を追おうとした駿平の腕を真理は放さなかった。

「ダメよ、駿平。これから桜沢宗和と食事なのよ。君が抜けたら、とっても困るわ」

駿平はその場でうな垂れた。

スタジオのドアを半開きにして、その様子を覗いていた雨宮健一がいた。

真理は、すかさず雨宮の表情をチラリと見た。雨宮は真理と視線が合ったことを確認するとシッカリとうなずいた。そして、雨宮の満足気な顔に、真理は背筋が寒くなった。

## 二十三、横恋慕

定期演奏会が終わった市民吹奏楽団はいつも、次の一週間は休みだった。

今日が演奏会以降、初めての楽団の練習だった。

いつもの時間に練習場に入ると、フルートの女達が僕をジロジロと見ていた。クラリネットの女達は僕を指差していた。

嫌な雰囲気だった。何となくその様子から悟るモノはあった。

楽器を取り出して、演奏の準備を始めるとホルン吹きが飛んできた。

「おいおい、戸倉！」

ホルン吹きは僕の肩に手を回し、僕の耳元で小さな声で言った。

「雨宮と何かあったのか？」

僕はドキッとした。

僕が上手く答えられないでいると、ホルン吹きのヤツはニヤリとしながら知ったかぶりで喋り始めた。

「やっぱりな」

ホルンのヤツは知ったかぶりの感じでうなずき始めた。

「雨宮、楽団を辞めたらしいぞ」

僕を指差して、ホルンのヤツはこう言い切った。

「やっぱり別れたんだ、こりゃ……そうか、そうか」

そう言って、ホルン吹きは僕の言葉を聞かずにスーッと去って行った。

（そういうことか）

僕は何もかも悟った。

桜沢宗和を囲んだ食事は十一時に終わった。

「駿平くん、またな。次回はアメリカで待ってるぜ」

そう言い残して桜沢は、お付きの車に乗り込んで去って行った。

「アメリカって、なんだ？！ さっきの話なんて冗談でしょ？」  
今の僕はその意味を理解しようとする気分でも気持ちでもなかった。

一刻も早く、律子に連絡を付けたかった。だが、真理はそれを簡単には許さなかった。

真理は僕を諭すように静かに言った。

「私には君が必要なよ、音楽的にね」

そして、僕の様子を下から舐めるように見上げた。

「考えておいてね、約束よ」

僕はますます解からなくなった。戸惑いと不安とで茫然としている僕に、真理は僕の頬にキスをした。

僕の心臓はバクバクと鳴った。

「駿平くん、また連絡するわ。いい返事を期待してるわよ」

そう言って真理はタクシーに乗り込んだ。

僕はしばらくボーッとしていたが、すぐに大事なことを思い出した。僕は慌てて律子のところに電話を掛けた。

考えれば当然のことだが、律子の携帯電話は電源が切られていた。しないよりはマシだろうと、メールを送って帰路に着いたのだった。

それから楽団練習日の今日まで、律子からの連絡は全く無かった。そして、こちらから連絡しても何の音沙汰もなかった。

自宅に連絡を入れると母親の奈津子が電話に出てくれた。だが、奈津子は僕に氣を使いつつ応対してくれたが、奈津子から出てきた言葉は冷たかった。

「駿くん、ごめんなさい。律子、もう連絡しないでほしいって」

その後何度か、携帯電話をコールしたが着信拒否され、自宅の電話も奈津子が出てくれたが相変わらず対応は冷やかだった。

僕の心の中は、絶望が支配していた。

そして、今日の楽団の雰囲気だ。僕の心には「ブルー」以外の色

はなかった。

合奏が始まる前、指揮台にバンドマネージャーが立った。こういう時は、重要な話があるのが常だった。

「えー、ファースト・クラリネットだった雨宮律子さんですが、先日の演奏会をもって退団、ということになりました」

練習場は一瞬、騒然とした。だが、それに関係なくバンドマネージャーは続けた。

「今後はピアノの方に専念されるということです」

楽団員は更にざわめき、僕を横目で見る視線が痛かった。

僕は、納得できない感じだった。どうにも腑に落ちない何かが、心の中に引っ掛かっていた。

楽団の練習が終わって、僕はいつものライブハウスに行った。相変わらず、マスターがにこやかに声を掛けてくれた。

「よう、駿平。今日は一人か」

マスターは、顎で店の中の方をしゃくった。

「今日も真理さん、来てるぜ」

そう言っ僕の背中を押して、店の中に引っ張った。真理はカウンター席でカクテルを飲んでいた。その様子を見て、マスターは僕に耳打ちした。

「真理さん、様子がおかしいんだよ。今日はピアノを弾かずにずーっと飲んでるんだ」

不意に、マスターは僕の肩を叩いた。

「駿平、あとは任せたからな」

マスターはそう言い終らないうちに、店の奥へと引っ込んで行った。

僕は、真理の横に座った。

「誰？」

真理は髪の毛を掃い上げて、こちらを見た。

真理はビクツと驚いた。



「あ……駿平」

「ごめん」

「でも、嘘じゃないのよ」

真理は、うわ言のようなことを言いながら、僕にしな垂れてきた。真理がどういう意味でその言葉を言ったのかは解からないが、僕は真理の背中に手を回し、そつと撫でた。

「アメリカ行きは本当のことなのよ」

真理は下を向いて、僕に寄り掛かったまま、先程よりはシッカリとした声で言った。

僕は鼻でフンと笑いながら言った。

「あの話は冗談でしょ？」

真理は、僕の顔を見た。

「いいえ、違うわよ。本気よ」

僕は、酔っ払いの真理の言葉はとも信じられなかった。

「それってどういうこと？」

僕は真理の背中に回した手を離した。

真理はムツクリと起き上がった。そして駿平を見た。

「桜沢が言ってたことはホント。冗談のように話してたけど、ホントなのよ」

真理は急に酒が抜けたような顔になった。

「私も録音が終わったらアメリカに行くの。そして、桜沢と組んであちらで活動する予定」

真理はグラスのカクテルを一口あおった。

「そこに君も来て欲しいの」

僕には寝耳に水だった。真理や桜沢が、そんなつもりだったなんてこれっぽっちも思わなかった。それに、僕には気掛かりなことがあった。

「でも、僕は……」

そう言つと、真理は僕の見つめた。

「ええ、分かってるわ。律子さんのことでしょ？」

真理は、カクテルをもう一口あおった。

「私がピアノも弾かずに飲んでるのはそのせいよ」

そして、真理はカクテルを飲み干した。

「大丈夫よ、そのことは。でも、今は何も言えないの、勘弁して。でも、必ず私が何とかするわ」

そう言って、真理は僕の手を握ってきた。

僕は小刻みにうなずいた。

「僕はどうすれば……」

僕は不安げにそう言つと、真理は握っていた僕の手を更に強く握ってきた。

「時が来たら事が動くわ。それまではじっとしていて」

僕は真理を見つめてうなずいた。

真理は僕に抱きついてきた。

「私は、君の才能に惚れたのよ。律子さんとは違う愛し方なの。それだけの」

真理は涙ぐんでいた。

「考えておいてね、アメリカ行き。お願い、よ」

そう言い終わると真理は席を立ち、フラフラしながらライブハウスを出て行った。

僕は複雑な気持ちだった。

律子との恋の行方。

真理との音楽の行方。

違う話のようでそうでもない。

三角関係のようでそうでない。

悲しい気持ちや絶望感を持ちながら、高揚感と嬉しい気持ちを持ち合わせている、今の僕の心の中。

僕はライブハウスに流れる音楽を、聴くともなく聞いて、時間を過ごした。

## 二十四、師匠と弟子

藤巻が自分のレッスン室であるロフトの鍵を開けて中に入ろうとした時、後から、若い女性に声を掛けられた。

「藤巻先生、お久しぶりです」

その声ができる方に反射的に素早く振り返った。

「なんだ、君か」

藤巻の驚きは安堵に変わった。

そこに立っていたのは、阿川真理だった。

「ずい分、立派になったなあ」

そう言いながら、レッスン室のドアを開けると同時に、真理をレッスン室の中に招き入れた。

「君が初めて俺のところに来た時は、小学生だった。ピアノはおろか、何も出来なかったのにな」

真理は照れながら、クスツと笑った。

「それはそうですね。先生のピアノを聞いてから始めたんですもの、音楽を」

藤巻もフフと笑った。

「そうだったっけな」

レッスン室の隅にある、古ぼけて艶がなくなったレザーのソファに真理は腰掛けた。

「先生、あの頃と何も変わってないですね」

真理は古ぼけたソファの表面を撫でた。

「このソファ、懐かしいわ」

そこへ、コーヒーをみなみと注いだマグカップを二つ、藤巻が持ってきた。そして、一つを真理の前のテーブルに置いた。

「変える必要がないからな」

藤巻は、自分の淹れたコーヒーをすすりながら言った。

「今日はどうしたんだ？ 俺のところなんかに来る必要は、もう無

いはずだぞ」

真理はコーヒを一口、ゆっくりと飲んでから、言葉を出した。  
「そんなことは無いですわ、先生。私の原点は、先生なんですもの。いつでも、原点に戻って確認したいですわ」

藤巻はその言葉に照れて、コーヒをガブガブと飲んだ。

真理はマグカップのコーヒを見つめていたが、やがて、藤巻を見据えてこう言った。

「先生、実はお願いがあつて来たんです」

その言葉に、藤巻はたじろぎ居直った。

「藪から棒に何だ？」

真理はまた俯いて、マグカップを見つめた。

「あの、戸倉駿平クンのことなんです」

藤巻はピクツとした。そして、一瞬のうちに思考が頭の中を駆け巡った。

「ま、まさか……！」

真理は、マグカップを見つめたままうなずいた。

「ええ、雨宮先生に頼まれて……」

藤巻は、左手の親指のつめを噛んで「チツ」と唇を鳴らした。

「そうだったな。君も一応、雨宮の門弟だったな」

藤巻はコーヒをあおった。

「雨宮のやつ、未だに『憂い』なんて言ってるのか。横恋慕の好きな奴だ、まったく」

だが、真理は髪を振り乱すほどの勢いで顔を上げて、藤巻を見据えた。

「でも、今は違うんですっ！　もう、そんなつもりじゃないんですっ！」

藤巻は真理を睨んだ。

「何が違うというんだ？！」

真理はスツと立ち上がり、藤巻と変わらぬ形相で藤巻を睨み付けた。

「私は、彼と音楽がしたいんです。藤巻先生譲りの、彼の感性が欲しいんです」

藤巻は眉間にシワを寄せ、一瞬たじろいだ。

「ん？　どういうことだ？」

真理はソファに腰を下ろして、静かに話し始めた。

「最初は、雨宮先生の思惑通りに彼を誘惑しました。何度か、彼のピアノの演奏、そしてトランペットの演奏を聴きました。それで、だんだんと彼の才能に引き込まれていきました」

藤巻は、顔を背けて聞いていた。

「桜沢宗和をご存知ですか？」

真理がそう言うと、藤巻は後ろ向きのままうなずいた。

「桜沢と私は、組んでアメリカで活動する予定なのですが、桜沢がトランペット奏者を一人望んでいました」

真理はソファに座り直した。

「そして、彼を桜沢宗和に引き合わせました。桜沢も、彼が気に入りました」

藤巻は白いＴシャツの背を向けたままだった。

「駿平を連れて行きたいんです！　彼を育ててみたいんです！」

藤巻はゆつくりとこちらを向いた。

「君に『育てたい』なんて台詞は十年早いぞ」

真理は恐縮した。

「生意気言つてすみません」

藤巻は真理を睨んだ。

「だが、本気なんだな？」

その言葉に真理はシッカリとうなずいた。それを見て、藤巻は伸びをしながら言った。

「まあ、そろそろ、奴も追い出す時期に来ているがな」

そう言った藤巻の顔は少し緩んでいた。

「でも、そのままだと雨宮の思っ壺だぞ。雨宮律子のことを、君は知っているのか？」

藤巻の言葉に、真理は真顔になった。

「律子さんのことは承知しています。でも、二人を引き裂こうとは思っていません」

真理は急にうつむいた。

「……確かに、途中まではそうでしたけど」

真理は居住まいを正した。

「駿平は、ホントに律子さんことが好きです。律子さんもそうです」

藤巻は頭を掻きむしった。

「ややこしいことは苦手なんだがな。ま、教え子のことだ、何とかしなきゃな」

藤巻の言葉に、真理の表情は明るくなった。だが、藤巻は厳しい言葉を続けた。

「だが、君に選択権はないんだぞ。選択権があるのはあの二人だ。二人が何を選択しても文句は言えない」

藤巻は厳しい顔になった。

「いいかい、これだけは約束してくれよ」

藤巻は真理を指差しながら微笑んだ。

真理は、ニコツとしてうなずいた。

## 二十五、奈津子と要一

「こんなところで、レッスンしていらっしやったのね」

初めて訪れた藤巻要一のレッスン室をマジマジと見回した雨宮奈津子は要一を振り返って言った。

「むさ苦しくて申し訳ないね」

そう言って、要一は頭をかきむしった。その言葉を受けて奈津子は首を振った。

「いいえ、そんなことないわ。要一さんらしくていいわ。いつからここでレッスンを？」

奈津子は要一の方を振り返って訊いた。

「日本に戻ってきてからだから、十年くらい前かな。細々とやってるよ」

奈津子は、ピアノに駆け寄って弾いてみた。

「これ、昔のままのピアノね」

要一は、ピアノの側板に手をかけて、それに応えて言った。

「そうだよ。使い慣れた道具が一番さ」

奈津子は嬉々としてピアノを引き続けた。

「なんだか、とっても懐かしいわ」

奈津子は嬉しそうに話したが、どこか表情が暗かった。要一はそれを察して話を切り返した。

「世間話や思い出話だけのために来たんじゃないだろ？」

その言葉を聞いて奈津子は、ピアノを弾く手を止めた。

あの土曜日の出来事は、奈津子にとってもショッキングなことだった。

律子が手ぶらで家に帰ってくるなり、部屋に閉じこもったままで口も聞けない有様だった。

だが、律子の父親であり奈津子の夫である雨宮健一は、全く動じ

ていなかった。むしろその事態を歓迎さえしている様子だった。

戸倉駿平から掛かってくる電話の応対で奈津子は薄々感じていたが、まさかと思いつながら二、三日して落ち着いてきた律子に、なだめるように聞いてみたのだった。

土曜日のスタジオのレッスンのこと、休憩していたら別のスタジオから駿平が現れたこと、そしてそれが横恋慕だったこと。

奈津子は、律子の話を聞いて愕然とした。

『あの人、またやったのね』

奈津子は、そうとしか思えなかった。健一が自分の娘にさえそんな想いをさせるとは考えもしなかった。

だが、悲しんでいる娘の律子にそのことを話すべきかどうかの判断はつかなかった。それよりも律子を慰めることが先だと、今しなければならぬことだと母親である奈津子は思った。

「律子、今はあなたを慰めることしかできないわ。ごめんなさいね」  
そう言つて、奈津子は律子を抱きしめた。そして、誰に相談しなければならぬか、奈津子の心にはすぐに思い浮かんだ。

藤巻要一であった。

すぐに、藤巻要一ところに連絡を入れ、奈津子は藤巻のレッスン室に出向いてきたのだった。

「うちの人、また……」

古ぼけたソファに座った奈津子は、目の前に置かれたマグカップになみなみと注がれたコーヒーに手を付けず、神妙な顔でポツリと呟き始めた。

だが、マグカップを持ったままソファの前で仁王立ちしていた要一は、奈津子の言葉をさえぎった。

「ああ、知ってるよ」

要一から発せられた意外な言葉に、奈津子は要一の方に向けて顔を上げた。

「……知ってたの？」



要一は、奈津子と向き合うように反対側のチェアに腰を下ろした。  
「ああ、健一の仕掛け人にさせられたのは、阿川真理だ」

そう言って、要一はグビグビとコーヒーを飲んだ。

「阿川真理さんって、うちの人の門下生の？ 来年デビューだって、うちの人が言ってたわ」

奈津子は少し驚いていたが、要一は相槌を打ちながら話を話した。

「一番最初は、俺の弟子、だったんだがな。その話はまあいい。その阿川真理が、ちょっと前にここを訪ねてきたんだ。そして、そのことを告白したんだ。」

奈津子は更に驚いて、落ち着きがなくなっていた。そんな奈津子の様子を見て要一が声を掛けた。

「大丈夫だ。真理は横恋慕じゃない。もっとも途中まではヤツの言うなりだったそうだがね」

要一は落ち着き払った声で淡々と述べた。要一の言葉に安堵しながらも、奈津子は律子のことを思うと気が気でなかった。

要一は、テーブルにマグカップを置いて話し始めた。

「でも、俺達の時と同じような状況だ」

その言葉を聞いた奈津子は表情が硬くなった。

「お、同じって？」

要一は身を乗り出した。

「真理のヤツ、駿平をアメリカに連れて行きたい、って言ってるんだ。もうその渡りも付けたらしい。どこまでが、健一の企みなのかは解からないがな」

奈津子は下を向いたが、要一は話を続けた。

「だが、真理には釘を注しておいた。『選ぶのは駿平だぞ』ってね」  
奈津子はようやく、コーヒーに口を付けた。少しすすってから顔を上げた。

「そう、そんな話になっていたの。律子はどう思っかしら」

要一はコーヒーをすすって、言葉を出さなかった。

奈津子は深い溜息をついてから呟いた。

「律子は付いて行くかしら？ それよりもうちの人々がそれを許すかしら？」

要一は腕を組んだ。

「まず、無理だろうな。俺達と同じ道を辿るって訳か」

マグカップを持つ奈津子の手が小刻みに震えた。

「それは、それはあんまりよ。私と同じ想いを律子にはさせたくない」

奈津子は顔を上げて、要一の顔を見つめた。奈津子のその頬には涙の跡があった。

要一は身体を伸ばし、マグカップを持っている奈津子の両手を包み込むようにそっと握った。

「君次第だよ、奈津子。君がシツカリしないとダメだ」

要一は、奈津子の手をシツカリと握った。

奈津子は、要一を見つめてうなづいた。

その時、レッスン室の扉が開いた。

「師匠、おはようございます」

そう言って入ってきたのは、戸倉駿平だった。

「今日はバッチリ練習してき……」

駿平は言いかけた言葉を途中で切り、ドアのところで動きを止めた。

「あれ？ 律子のお母さん……」

駿平は、ビックリして目を丸くした。

奈津子は、優しく駿平に微笑んだ。

「しばらくぶりね。元気そうで何よりだわ」

駿平は慌てて頭を下げて詫びた。

「すみません！ 僕が、僕が……」

ひたすら謝り続ける駿平に、奈津子は声を掛けた。

「いいのよ、謝らなくて。大丈夫よ。」

それでも頭を下げ続ける駿平の肩を要一が叩いた。

「もういいんだ、駿平」

駿平は要一の顔を見上げた。それに呼応するように要一はうなづいた。

「事情は分かっている。今度、律子さんも加えて話をしよう」

要一の言葉に、奈津子はうなづいて言った。

「そうね、それがいいわ。そうしましょうよ」

駿平は頭を上げて、潤んだ目を奈津子と要一に向けていた。

要一と奈津子は、駿平に向かってうなづいた。

## 二十六、対決

気だるい日差しの日曜日の午後、僕と師匠の藤巻要一は雨宮家の応接間に居た。

当然の如く、父親の健一は不在だった。

母親の奈津子が一番好きなディンブラのストレートティと、奈津子が手作りしたクッキーを、四人は無言で口にした。

奈津子は、藤巻の顔をジーツと見つめていた。藤巻も、奈津子を時々見つめていた。そして、二人は時々うなずき合った。

時間が引き伸ばされたように長い沈黙が横たわっていた。時間が流れていく音が聞こえそうだった。

奈津子と藤巻は、目と目で会話して楽しそうだったが、僕と律子も居たたまれない雰囲気だった。

久しぶりに律子と逢ったのだ。

Nスタジオのあの一件以来、逢うことはもちろん、メールも電話も何一つ連絡が無かったのだ。

僕は目を合わせるのも辛いくらいで、演奏会やコンクール以上にドキドキしていた。

だから、時々チラッと律子を見るのが精一杯だった。

律子も時々見ていたようだが、ほとんど下を向いていた。

まんじりともせず、四人がソファに座っていた。

お互いに目を合わせることもなく、姿勢を変えずにジーツと座っていた。

奈津子と藤巻は一緒にうなずいたと同時に僕と律子を見た。そして同じ意味の言葉を吐いた。

「私達の話聞いて」

「話を聞いてくれ」

僕と律子は、ソファに座り直した。

奈津子は藤巻に微笑んでいた。

そして、藤巻も奈津子に笑い掛けていた。

「俺達は、恋人同士だったんだ。だが、奴に引き裂かれたんだ」  
藤巻がそう言った。

「あの人の策略に、私達は嵌められたの」  
奈津子がこう付け加えた。

僕達は、驚きの表情で顔を見合わせた。  
そして、僕はおずおずと訊いた。

「あの人って？」

二人は同時に答えた。

「うちの人よ」

「健一だ」

藤巻はゆっくりと語った。

「健一と俺は、同じピアノ科の学生だった。よきライバルだった」  
奈津子が言った。

「そして私はヴァイオリンの学生。私と要一さんは、高校から付き合っていたわ」

藤巻は溜息をつくように言った。

「ま、奴の方が音楽以外のことは上だったんだな。俺は、残念なことに音楽バカだった。だから俺は、奴に言い包められて身を引いた」  
奈津子が涙目で語った。

「辛かったわ。あの人の言葉を信じてしまったの。その後一年も経たないうちに、それが『策略』ってことに気付いたわ」

奈津子と藤巻は顔を見合わせた。そして、フフフとお互いに笑った。

「私達のことはいいのよ。こんな地位になったのもあのヒトのお陰だし」

奈津子はそう言い、藤巻はこう言った。

「俺も、奴の後押しでヨーロッパに行った。アメリカでも活躍できた」

奈津子は紅茶をすすり、藤巻はクッキーをかじった。

「今度、私のリサイタルで、ピアノを……」

「君の伴奏をしたいな」

二人は、苦笑していた。そして、声を出して笑い始めた。

二人の和やかな会話に、僕と律子もくつろいだ。

だが、二人は僕と律子をキッと睨みつけたのだった。

「問題は、君達二人のことだ」

藤巻がそう言うと、奈津子は大きくうなずいた。

その時だった。

律子と奈津子、そして駿平と藤巻の四人が、応接室で現状と今後を和やかに語り合っていたその時、応接室の扉が突然、バン！と開け放たれた。

「私は許さん！ 絶対に許しはしないぞ。絶対にだ！」

そこに立っていたのは、雨宮健一だった。般若のような形相で、四人を睨んでいた。

「律子っ！ お前は頂点まで昇り詰めるんだ。その為に、私はどれだけ努力してきたことか！ お前はそれが解かっているのか！」

奈津子が何か言おうとしたのを健一は押し留めた。

「奈津子、君は黙っていなさい」

健一は律子に向き直り、優しく語りかけた。

「いいかい、これは『試練』なんだよ。乗り越えて会得しなきゃならない『憂い』なんだ」

律子は、膝に置いた手を握り締め、ワナワナと打ち震えていた。

健一は、律子の様子を見てから、向き直って藤巻を睨んだ。

「それにしても藤巻よ。貴様は何しに来たのだ！」

健一の声は打ち震えていた。

「私の邪魔をするとはどういう見なのだ！ 貴様にチャンスをやったのは誰だと思ってるんだ？！」

それから、健一は駿平の方に視線を変えた。

「それに、戸倉君。いい想いをさせてあげたのだがね！ それだけじゃ不満か？」

駿平は握り拳で立ち上がった所を、藤巻が首を振りながら腕で押さえた。

健一はもう一度、律子の方に視線を戻した。

「いいか、律子。私の後継という意識はあるのか？ 日本で一番賞賛されるピアニストになれるんだぞ」

健一は懇願するように言った。

「私は、お前をそうさせたいのだ。解かってくれるな、律子」

律子はずっと顔を伏せたまま、震えていた。

健一はニヤリと笑って、藤巻と駿平を見た。

「さあ、藤巻さん、それに戸倉君。お引取り願おうか」

藤巻は苦虫を潰したような顔で、駿平は握り拳が震えたままだった。

だが、どうすることも出来なかった。

その時だった。

律子が突然、スクツと立ち上がった。そして目を見開いて、父親の健一を睨み付けた。

「私、お父さんの人形じゃないわっ！」

健一はたじろいだ。

「おいおい、律子。何を言い出すかと思ったら……」

律子は更に健一を睨んだ。

「お父さんの音楽は、音楽じゃない！ だって、だって、全然楽しくないわっ！」

健一は驚きで顔が強張っていた。

「私、駿平とライブハウスで演奏した時、楽しかったわ。心が躍ったわ。初めてピアノを弾いていて楽しいと思ったわ。みんなの拍手、優しい掛け声、とっても嬉しかった……」

律子の頬に涙が一筋、流れた。

「楽しくない音楽なんか奏でたくないっ！ もう、お父さんなんかに教えて欲しくないわっ！」

律子は急に頭を左右に振り始めた。

「もう嫌よ、イヤーツ！」

そう言って、律子は応接室から飛び出して行った。

奈津子は、追いつがるように律子の後を追った。

健一は、呆けた顔で立ち尽くしていた。

啞然としていた駿平の肩を叩いた藤巻は帰り支度を始めていた。

「帰るぞ。今日はレスン日だったよな」

和やかに駿平を見詰める藤巻はそう言った。駿平はうなずいてソファを立ち上がった。

藤巻は応接室を出る前に、雨宮健一の肩を叩いた。

「なあ、雨宮。いつもいつも自分の思い通りになる訳じゃあ、ないんだぜ」

健一は、いまだショックから抜けきれずに、膝から碎け落ちるようにしゃがみ込んだ。

藤巻と駿平は、雨宮家を後にした。



## 二十七、嵐のあと

窓から吹き込む、静かで優しい風が、レースのカーテンを揺らしていた。

同じ風が、律子の髪も揺らしていた。

律子は、自分の部屋のベッドの隅に座り、窓から外を眺めていた。外を眺める律子の目は当てもなくさ迷い、宙を見据えていた。部屋にドアをノックする音が響いたが、律子は微動だにしなかった。

鍵が掛かっていないドアが開いて、母親の奈津子が入ってきた。

「律子」

そう呼び掛けた奈津子の声にも律子は反応しなかった。

「律子、気分はどう？」

そう言って奈津子は、ベッドに座っている律子の横に座った。

「お父さん、ビックリしてたわ。……私もビックリしたけどね」

優しく笑顔で語り掛ける奈津子に、律子は未だに微動だにしなかった。

「一度にいろんなことが起こっちゃったわね」

奈津子は一度、律子の顔から視線を外した。

「お父さんの仕業なのは、薄々感じ取っていたわ」

奈津子は、改めて律子の顔を覗き込んだ。

「だけど、私と要一さんみたいにはなって欲しくなかったから」

律子は、母親の奈津子の顔を見た。

「私、私……」

律子はしゃくり上げそうになるのを抑えながら、搾り出すように言った。

その嗚咽のような言葉を聞いた奈津子は、そっと律子の右手に左手を重ねた。

「大丈夫よ。お父さん、分かってくれるわ」

律子の頬に涙が一筋、流れ落ちた。

奈津子はそつと律子の肩を抱きしめた。

「選ぶのは、あなたよ。律子の想うままでもいいのよ」

律子は母親の肩にうな垂れた。

雨宮家から帰り道、僕は師匠に話し掛けた。

「師匠、今日は僕のレッスン日じゃないですよ」

師匠は前を見たまま、答えた。

「いや、今日はレッスン日だ」

師匠は立ち止まって僕を見た。

「お前の、最後のレッスンだ」

言い終わると、師匠はまた歩き出した。

ロフトのレッスン室に着くと、藤巻は鍵を開けた。

見慣れた、ピアノが置かれたレッスン室だ。

僕がピアノのカバーを外そうとした時、師匠は僕に声を掛けた。

「今日、ピアノは弾かない。そのソファに座っている」

僕は「え？」と思った。

レッスンなのにピアノを弾かないなんて有り得ないことのように思った。

師匠は、コーヒーマーカーのスイッチを入れてドリップさせ始めた。

そして、マグカップになみなみと注いだコーヒーを僕の前に置いた。

師匠は、コーヒースプーンをすりながら僕にこう言った。

「もう、お前は卒業だ。俺の所から巣立つ時が来たんだよ」

僕は、すすったコーヒーストームを噴出しそうだった。

「え？ 卒業って？ ということなんですか？」

師匠は、コーヒーストームをゴクリと一口飲んでから言った。

「阿川真理に会ったよ」

師匠の言葉に、僕はビククリした。

「真理さんに会ったんですか？」

師匠は「フッフ」と笑いながら言った。

「阿川にはレッスンしたことがある。彼女は立派に成長した」

師匠は再び、マグカップのコーヒーをすすった。

「彼女に付いて行っても悪くないぞ。いい機会だ。修行してこい」

僕はちよつと嬉しくなった。師匠に認められたこともそうだが、真理や桜沢と仕事が出来ること嬉々とした。

だが、それを察知して師匠は言った。

「それでお前、律子さんのことはどうなんだ？」

師匠の言葉で、忘れていた大切なことを思い出し、僕は少し下を向いて答えた。

「あ、はい。それなんですけど……」

藤巻は腕を抱えて唸った。

「うーむ、難しいことだな。俺の時と同じだな」

師匠は立ち上がって、宙を見ながら言った。

「お前達には、将来がある。だが、それを決めるのはお前達だ」

師匠は腕組みをした。

「俺でもない、雨宮でもない、阿川でもない。……解かってるな」

僕は、コクリとうなずいた。

「だがな、雨宮健一は簡単な奴じゃない。たぶん、律子さんはお前とは一緒に行けないだろう。それぞれで頑張れるのか？」

そう言っ て師匠は僕に向き直った。

僕は、師匠を食い入るように見つめた。

律子は、大通りにあるオープンカフェで待ち合わせをしていた。グレーのショートジャケットにオフホワイトのタートルネックセーター、黒のプリーツスカートにベージュのウェッジパンプスという、律子にしてはちよつと大人びた格好だった。

そこへ、息を切らしながら近づいてきた女の人がいた。セミロングの栗色の髪、白のスキッパーシャツの上に黒系のレイヤードニッ

ト、カーキグリーンのカプリパンツにバックルベルト、スエード調パンプスの装いで現れたのは、阿川真理だった。

「ごめんなさい」

真理は、抱えていた衣装バッグを隣の席において、律子の前に座った。

「呼び出しておいて、遅れるなんて」

目ざとく近づいてきたウエイトレスに、真理はエスプレッソを注文した。

「ホント、ごめんなさい。打ち合わせが長引いちゃって」

真理は、律子に頭を下げた。律子は首を横に振って応えた。

「いいえ、まだ10分くらいですから」

律儀に答える律子に、真理は微笑み返した。

「ふーん、そっか。駿平はもっと待たせるんだ」

そう言われて、律子は赤くなつて顔に手を当てた。

「いえ、そ、そんなことはないですっ」

真理は、律子に更に深い微笑を返した。だが、すぐに真顔に戻った。

「もう一度、あなたに謝らなくちゃね。ホントにごめんなさい」

真理は膝に手を置いて頭を下げた。律子は、恐縮して肩が吊り上がった。

「そんなこと、ありません。私も誤解してたから……」

真理は顔を上げて、ニツと笑った。

「途中までは本気だったのよ、今でも、駿平に恋しているわ」

真理にそう言われて、律子はドキッとした表情を見せたと同時に、ムツとした表情も見せた。

真理は律子の表情に構わず話し続けた。

「もつとも、今は『駿平の音楽に』だけどね」

律子は、ちよつとホツとして溜息をついた。

「横恋慕は、音楽だけよ」

真理は、ウエイトレスの持ってきたエスプレッソに口を付けた。

一口飲んでから、真理は話を続けた。

「それでね、駿平を貸して欲しいの」

律子には何のことだか、戸惑いの表情を見せた。

「彼の音楽に、私は惚れたの。彼を育ててみたいのよ」

律子は、真理からの思い掛けない言葉に戸惑った。

「それって、どういうことですか？」

律子は、話が分からないことを真理に伝えた。

「彼をアメリカに連れて行って、あなたに恥ずかしくないミュージシャンにしてみせるわ」

律子は、更に混迷を深めた。そして、正直な気持ちを口にした。

「分からないわ、突然にそんなことを言われても……」

律子の顔を見つめていた真理は視線を外して、冷めかけたエスプレッソを飲み干した。

「そうよね。急に言われても困るわよね」

そして、真理は何かを思いついたようにテーブルに肘を付いて、律子に迫った。

「それとも、あなたも駿平と一緒に来る？」

## 二十八、律子と駿平

僕は、何度かためらった。

だが、どうしても必要なことなんだと言い聞かせて電話をした。

電話を掛けた先は、律子の携帯電話だった。

<プルルルル、プルルルル、……>

呼び出しコール音が耳の中に繰り返される。いつ律子が電話に出るのだろうか、ヤキモキしながら呼び出しコール音を聞き続けさせられている。律子につながるだろうか。

突然、呼び出しコール音が途切れた。つながるまでの時間が以上に長く感じられた。

「……はい」

か細い声で、様子を探るかのような、律子の声だった。僕はその声を聞いて、背筋が伸びたような感じがした。

「しゅ、駿平です。あ、あの……」

それでも僕はシドロモドロだった。何をどういえば言いか、何も思い付かなかったし、何も考えられなかった。律子に電話したのはいいけれど、言葉が全然出てこなかった。

僕がアタフタしていると、律子の声が聞こえた。

「駿平」

それは、律子の小さな声だった。辛うじて聞き取れた声だった。

だが、僕はその声で我に返った。

「なに？」

僕は、いつもの感じで反応してしまった。

「……」

だが、律子の反応も定まらなかつたらしく、無言のままだった。

僕は、何も考えないままに言葉が口から出た。

「逢いたいんだけど、ダメかな？」

しばらく時間が流れた。

律子は辛うじて、聞こえる声で返事をした。

「うん、私も逢いたい」

僕は、ライブハウスのカウンターで、いつも通りにコーラを飲んでた。

「駿平、今日は弾いてくれないのか」

マスターはいつも通り、僕に声を掛けてくれた。

「上手くいったらね」

僕がそう言くと、マスターは怪訝な顔をした。

「律子ちゃんか」

マスターがそう言くと、僕は苦笑いをした。

マスターはその意味を悟ったらしく、こう答えた。

「じゃあ、あとで頼むぞ」

僕は手を振って答えた。

マスターはうなずいて、店の入り口の方を見た。

すると、女の子が1人、店に入ってきた。それを見てマスターは声を掛けた。

「律子ちゃん、こっち、こっち」

マスターは、律子を手招きした。

水色のチェック柄のスカートに白のブラウスに紺のスカーフ、ベージュのカーディガンの律子は、初めて一人で店に入ってきて、オドオドしながら店を見回していた。

マスターの声に気が付いて、律子は軽く微笑んで、小走りにカウンターにやってきた。

マスターは満面の笑みで、律子にこう言った。

「律子ちゃん、いらっしやい。よく一人で来れたね。立派、立派」

律子はちよつとむくれた。

「やだー、マスター！ 私、子どもじゃないわよ」

律子はマスターに文句を言った。

「冗談だよ、冗談」

そう言つてマスターはカウンターの中に入った。

律子は、僕の横に座つた。いつも通り、何気なく、それこそいつもの「癖」のように。

これはマスターが場を和ませてくれたからだろう。

僕は、律子に声を掛けた。

「元気だった？」

律子はビクツとして僕を見た後コーラのグラスを見つめながら、うなずいた。

思つたよりもはしゃいでいる律子に、僕は正直なところ、驚いていた。

「うん、元気よ」

僕は、コーラを一口含んだ。

「そう、良かった」

律子は、グラスを見つめたまま、おずおずと、でもハキハキと喋つた。

「ごめんね。私、誤解してたのね」

僕は、律子の言葉に慌てて言い返した。

「僕の方こそ、誤解されるようなマネをして」

律子は僕の方を見た。その顔は満ち足りた顔だった。

「もういいのよ。みんな、父の仕業なんだから。謝らなくてもいいわ」

そう言つて、律子は満面の笑みを僕に見せてくれた。

「ねえ、マスター」

律子は、カウンター越しにマスターを呼んだ。マスターはにこやかに話し掛けた。

「なんだい、律子ちゃん？」

律子は目配せしながら、マスターにささやいた。

「今日の二杯目は、コーラじゃなくて『アフィニティ』っていうカクテルにしてください」

マスターは、ちよつとビククリした。



「カクテルとは。律子ちゃん、大丈夫かい？」

律子はニコニコしながら言った。

「大丈夫よ。駿平の分もお願いね」

マスターはグッジョブサインを出して応えた。

「OK。しばらくお待ちを」

律子は僕を見て、フフと笑った。

「律子、どうしたんだい？」

僕は、律子の行動に驚いて、つい言葉にした。

「うん、だって今日は気分がいいの。だって、大好きな駿平に逢えたんだもの」

そう言っただけで、僕の腕にしがみついていた。僕は、少し恥ずかしくなった。

「おいおい、なんか照れ臭いよ」

それでも、律子は僕にしがみついてきた。

「いいの」

そこへ、マスターが律子が注文したカクテルを持ってきた。僕と律子の前にカクテルグラスを置いた。

カクテルグラスには、深い琥珀色を湛えた『アフィニティ』が満たされていた。

「律子ちゃん、意味深だね。『親近感』を意味するカクテルを注文するなんて」

マスターにそう言われて、律子は頬を赤く染めた。

「分かっちゃった？」

マスターはニヤリと笑って、カウンターの奥に消えていった。

「乾杯ね」

僕と律子は、グラスを持ってグラスを打ち鳴らした。

少しだけ飲み干した後、僕は律子に静かに話し出した。

「僕は、真理さんとアメリカに行こうと思ってる。師匠からはお許しが出た」

律子は、僕の話の黙って聞いてうなずいた。

「律子はどう思う？」

律子は唇を一字にして言った。

「うん。……お父さんから真理さんのことは聞いたわ。それにアメリカ行きの話は真理さんから聞いたわ」

僕は、もう一口、カクテルを飲んだ。

「一緒に行くことも出来るんだけど？」

律子は、グラスを両手で持ったまま、首を横に振った。

「やっぱり、そんな訳にはいかないわ」

律子の言葉を聞いて、僕は視線を落とした。

「お父さん、か」

律子はコクリとうなずいて、急に元気な声で話し始めた。

「それにね、私も頑張りたいのよ、ピアノで」

僕は、律子を覗き込んだ。最初にデートした時の強張った硬い笑顔だけど、ハキハキとして落ち着いた声で、律子は話を続けた。

「だって、駿平がアメリカで頑張るって言うんだもん、私だって日本で頑張らなきゃって思ったの。場所が違ったって、それって出来ることよね？」

律子が僕を覗き込むように言った。僕はためらいながらも言葉を出した。

「それはそうなんだけどさ」

曖昧な僕の返事に律子はちょっと声のトーンを下げた。

「いつでも好きな時に逢えないのは、ちょっとツライかもね。えへ」

言い終わると、律子はカクテルを一気に空けた。

「おいおい、無理するなって」

僕は、律子をなだめた。

「大丈夫よ、これくらい」

律子は胸を叩いて誇示した。その姿に僕は思わず、クスクスと笑ってしまった。

「な、何が可笑しいのよっ！」

律子が言えば言うほど、僕は笑いがこみ上げてきた。

「もう、知らないっ！」

律子は、プイと横を向いてしまった。

僕は笑うのを止め、律子の両肩をつかんで僕の方へ強引に向きを変えた。

「分かったよ。十分すぎるほど分かったよ、律子の気持ちが」

律子は肩を抱きすくめられてビックリして身体に力が入っていたが、僕の言葉を聞いてその力が抜けていくのが分かった。

「時々、戻ってくるよ。律子のために」

僕がそう言くと、律子の頬に涙が一筋流れた。

そして律子は静かに目を閉じた。

僕は、ゆっくりと律子に近づいていった。

そして、お互いの唇が触れ合った。

とても、とても長い一瞬だった。

僕は、ゆっくりと顔を離して、静かに目を開けた。

律子の頬が赤く染まっていた。

律子がゆっくりと目を開けた時に、僕はもう一度訊き直した。

「律子は大丈夫？　僕は……」

僕が心配そうに言くと、律子はアツケラカンと言った。

「時々、戻ってきて。私のこともちゃんと見てね」

僕はうなづきながら、律子をハグした。

「おほん、おほん」

ワザとらしい咳払いをして、マスターが現れた。

「そろそろさー、弾いてくれないかなー、駿平」

僕がうなづく前に、律子が言った。

「マスター、今日は私と駿平で連弾するわ。いいでしょ？」

マスターは、拍手をして喜んだ。

「それはブラボーな提案だね。よろしく頼むよ、律子ちゃん」

律子は僕の手を引いて、ステージに向った。

## 二十九、その後

何日かが過ぎた後、僕は律子と母親の奈津子と共に、師匠のレッスン室を訪ねていた。

「あの人、遂に折れましたわ。『律子の好きにきなさい』って」

奈津子は、満面の笑みで藤巻に語り掛けていた。

「でも、さすがに海外へ行くことまでは無理でしたわ」

奈津子は少し残念そうだったが、藤巻は相変わらず微笑んでいた。  
「雨宮の性格から言って、それは固持するだろうな。それにヤツの立場も微妙になるだろうし」

藤巻は、律子の方を向いて尋ねた。

「それで律子さん、どうするつもりなんだ？ 俺が力になれることがあれば言ってくれ」

藤巻からの言葉に、律子は晴れやかな顔で藤巻にこう告げた。

「私、師匠さんに教わりたいんです。駿平がどんな風に習ったのか、知りたくて……」

そう言つと、律子は赤くなつてうつむいた。

藤巻は頭をかきむしった。

「力になるとは言つたが、そいつはな」

藤巻は引きつりながら奈津子に言つた。

「雨宮の奴、俺では首を縦に振らんだろう」

奈津子は横目で律子を見ながら、未だに笑みが絶えなかった。

「あの人もいろいろと条件を出してきましたわ。ところが、要一さんならOKをくれましたの」

奈津子はこれまでに見たことも無い笑顔でこう言つた。

「是非、ご教授をお願いします」

藤巻は頭をボリボリと掻きながら驚いていた。

「ふーん、あの雨宮がね。娘にや弱いんだな、やっぱり」

師匠は僕のほうを向いて、鋭く言つた。

「ところで、駿平！ 律子さんとはどうするんだ？」

僕は師匠に向き直って姿勢を正した。

「僕は、真理さんとアメリカに行きます。そして、研鑽を積んでいきます。その間、律子は師匠に鍛えてもらいます」

律子はコクリとうなずいて言った。

「そして、いつか一緒に演奏します。それが、今の私達の目標なんです」

師匠は腋の下をポリポリと掻きながら言った。

「逢わなくて大丈夫か？ 頑張れるのか？ …… 音楽の方じゃないぞ！ 二人のことだ！」

僕は律子を見た、律子も僕を見た。

そして師匠に言った。

「大丈夫です。頻繁に日本へ帰ってきますから」

師匠は僕の額にデコピンをした。

「バカヤロー！」

そう言って師匠は「はっはは」と馬鹿笑いした。

僕も、律子も、奈津子も同時に笑い始めた。

僕は阿川真理からの電話で呼び出された。

あの、Nスタジオの二階の三番スタジオに。

スタジオの重々しい扉を開けてコントロールルームに入ると、そこには阿川真理と彼女のマネージャー、そして師匠である藤巻要一も居た。

「ハンコ、持ってきたか？」

師匠は、ぶっきら棒な言い方で僕を迎え入れた。真理はフフフと笑って、師匠をいなした。

「先生、サインでもいいんですから」

師匠は分かっているという表情を見せて苦笑いした。

真理は、突っ立っている僕をソファに座るよう促した。

「戸倉君、この世界は契約社会だから、契約してもらわないといけ

ないの」

僕はうなずいた。真理は続けて説明した。

「簡単に説明するけど、君は勉強しながら、私達と活躍してもらうことになるわ」

真理は微笑みながら、僕を見つめていた。

「ピアノは私に師事、トランペットは桜沢に師事、というカタチね」

真理は簡単なスケジュール表を見せてくれた。僕はその表を覗き込んだ。

「それで、これが年間のステージ回数。大きなホールから小さなライブハウスまで百八十回程度。結構キツイわよ」

真理は僕に微笑みかけた。僕は少しビビっていた。

「僕で大丈夫でしょうか？」

真理は、僕の肩を叩いた。

「何を言ってるの！ 私と桜沢が見込んだのよ。やれるわよ。私が立派に育てて見せるわ」

僕は精一杯の笑い顔を真理に見せた。

「大丈夫よ。君なら必ずやれるわよ」

真理にそう言われて、僕は照れて耳まで赤くなった。

「まだまだ、くちばしの黄色い雛だな」

師匠は、僕に対する嫌味を忘れていなかった。でも、それは本当のことだった。

「いよいよ、これで駿平もミュージシャンよ」

そう言って真理は僕に微笑んだ。師匠が拍手をして僕を祝福してくれた。

そこへマネージャーが割り込んできた。

「さあ、駿平くん。君の記念すべき第一歩を記してくれたまえ。その前に、契約書の確認を」

マネージャーは、僕に契約書を読み上げ始めた。

「その前に、一つだけ……」

僕がそう言うと、マネージャーは優しい微笑を湛えて言った。

「大丈夫だよ。君の望んだ『二ヶ月に一回の帰国』の条項は入ってるよ」

僕は、赤くなりながらホッとした。

その様子を見て、真理が言った。

「シツカリやらないと、私が帰国許可を出さないかもよ」

僕はビクビクして真理の方を見た。

「脅かさないでくださいよ」

真理は大声で笑い、師匠の藤巻は失笑していた。

### 三十、旅立ち

大きなスーツケースを持った人々が行き交い、遠く離れたイミグレーションの奥にあるデューティーフリーショップからの香水の匂いが、空港会社の手続きカウンターまで匂っていた。

ここは、某国際空港の搭乗口。

「アテンション、プリーズ。 航空二三七便・ニューヨーク行きに搭乗予定のお客様、南ウイング八番ゲートにて搭乗手続き中でございます……」

飛行機の出発を告げるエコーの効いたアナウンスが、広大なロビ―に響いていた。

手荷物だけになって身軽になった僕は、少し離れて待っていた律子のところへ駆け寄った。

「出発まで一時間もあるから、ラウンジに行こうよ」

僕がそう言うと、律子は微妙なニュアンスの言葉を返してきた。

「あと一時間しかないのね、一緒に居られる時間は……」

僕は、律子の言い方に少し切なくなった。

「そんな言い方、しないでくれよ」

僕は無理やり笑いながら、精一杯の皮肉を言った。

「これが永遠の別れって訳じゃないんだからさ、すぐに戻ってくるからさ」

律子は下を向いて、涙を拭ってから僕を見た。

「そう、そうよね。私ってダメね」

そう言っ、律子は精一杯の笑顔を僕に見せてくれた。律子の目は、もう既に真っ赤になっていた。

「じゃ、行ってくるね」

僕は、律子と握手をした。律子は、僕の顔を見つめてうなずいた。「いってらっしゃい。気を付けてね」

そこへ阿川真理が僕の背中をグイッと押した。



「そこのお熱い、お二人さん。ギュッと抱き合ったっていいのよ」

僕と律子は真っ赤になっていた。その姿を見て、真理が呟いた。

「……はあ、羨ましいわあ」

真理と駿平は、イミグレーションに消えて行った。

駿平は時々振り返って、大きく手を振っていた。

律子も、それに合わせて手を振っていた。

二人の姿が見えなくなった頃に、低い声が聞こえた。

「これからが大変だな」

振り返ると、そこに雨宮健一が立っていた。

律子と奈津子、そして藤巻も驚いていた。

「律子、戸倉君に負けないように」

律子はちよつとムツとした。また、健一の台詞が始まったと思った。

「でないど、彼とはセッション出来ないぞ。戸倉君は、凄い進化をするかもしれない」

健一は、少しはにかんだ。

「楽しみだな」

健一は律子の方を向いて、にこやかに笑っていた。

「律子、負けちゃダメだぞ」

律子はそれを聞いて微笑んだ。

「うん」

律子は、うなずいて駿平が消えて行った方向をずっと眺めていた。

そんな律子の姿を、健一は穏やかな表情でジーツと見ていた。まるで勝ち誇ったように。

### 三十、旅立ち（後書き）

完結しました。

感想など、お寄せいただければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4078f/>

---

Only the piano : her friend.

2010年10月8日14時39分発行